

330-8



讀書法

吐堂叢書
第一卷

明治
43. 4. 23

自序

文字は筌蹄にして書籍は瓦子たり、瓦子を求めて敲門の實なく、筌蹄を尋ねて魚兔を逸せば、讀書萬卷、何の贏ち得る所ぞ。畢竟讀書は是れ第二義の事、之れを自家頭に將ち來り、之れを日常行中に體現するに至て、初めて其の眞趣を見る。如何か之れを自家頭に將ち來り、如何か之れを日常行中に體現すべき、言外趣あり、汝の見るに任せ、書中理あり、汝の探ぐるに任ず。

○ 古より皆な才あり、獨り周公の才を稱し、古より功あり、獨り大禹の功を推す、古來著書幾億萬、然かも今に不朽なるものは唯だ聖賢の書あるのみ、聖賢の書は千古の金言にして不磨の教訓なり。此の不朽の書を読み、不朽の才を運らし、不朽の功を樹つ、當にこれ大丈夫畢世の快事たり。

○ 周公の才何が故に獨り稱せられ、大禹の功

何が故に獨り推され、聖賢の書何が故に獨り用ゐらる。古人いふ彼の書や功や才や、皆な之れを率ふるに徳を以てしたるにありと、徳は力なり、吾等は書籍を通して此力に觸れ、文字を介して此力に接す、讀書は第二義なりといふと雖も、吾等は之によりて第一義諦を觸發するの動機を得べし。

○ 誰かいふ、字を識る憂患の始と、理想なきものに煩悶なし。字を識るは是れ吾等が理想

に晴を點するなり。よし之れによりて多少の憂患を免れずとも、彼の目に一丁字なくして醉生夢死するものに比して優ること萬々なるにあらずや。

○

旅客あり、日暮れて道遠し、而して彼れは岐路に迷ひつゝあり。彼れの爲めに行くてを指し、其の知り得たる限りを悉くして前程を示すは決して無用の業にあらじ。予の書を著す着眼多く此處にあり。敢て斬新の見、卓拔

の識あるにあらず、僅に知り得たる所を以て未だ知らざるの人を導かんとするのみ、其の前程に輝ける理想を示して不朽の眞理を説き、旅行に趣味ある捷徑を示して不朽の功を樹つる如きは世自ら人あり、我が才の及ばざる所、予は唯だ迷人迷路の一路標たるを得ば足れり。脚下道縦横、一路春風通ず、識者請ふ其の婆心を笑ふ勿れ。

庚戌初春讀書法粹に上の口

咄 堂 識

凡例

一。文を屬する既に法あり、書を読む豈に其の法なからんや。業を授くる既に法あり、學を受くる亦其の法なきを得じ。本書は先人の所説を參酌し加ふるに乏しき著者が經驗を以て聊か此の讀書と學修とに關する注意を示したるもの、敢て大方識者の劉覽を汚さんとするにはあらず、唯だ初學の士が之れによりて讀書に針を得、學修に訓を得るあらむことを望むのみ。

一。古來讀書に關する書、汗牛充棟も雷ならず、或は潛心の工夫を説き、或は選擇の要をいひ、或は殊に泰西の書に於て立言し、或は専ら東洋の書に就て言議す、著者は著者の及ぶ限りに於て諸書を參考し、特に現代學生に必要なりと認むるものを採て此の書を成し、其の一私言にあらざるものは書中一々出所を舉げて之れを明にせり。

一。通俗と平易とは此種の述作に於て缺くべからざる要件なりと思惟したるが故に著者は著者が日常講演せる體に基き、言に近きの文、文に近きの言を以てせり、然かも不文尙ほ此の要件を充す能はざりしこと少からざりし

凡例

を想ふ、これ志あつて力到らざるの罪、讀者請ふ諒せよ。

二

一。現代に於ける名著の指示は此種の述作に於て最も必要なを思ふと雖も、著者の學淺く知る所狭くして選擇を誤ること多かるべきを想ひ主として先人の選擇を紹介し、現代に於ては其の一二を擧ぐるに止めたり。

一。卷末掲ぐる所の社會教育論は著者の未定稿にして研鑽未だ盡くさるるもの多しと雖も、讀書裡に得來れる所のものを應用するの一法として必ずしも不用ならざるべきを信じて添付することゝなしぬ。若し夫れ其の缺けたる所に至ては拙著「世態論」に於て之れを補ふの機あるべし、亦深く答むる勿れ。

庚戌三月

著者識

讀書法目次

第一編 讀書の方法

第一章 讀書法の必要

一 書籍の歴史

文字……上代の書籍……木皮……パピルス……羊皮紙……
……文藝の復興……印度の書籍……支那の書籍……紙と筆……
……印刷術の發明……日本の書籍……寫經……讀書の困難……
……日本に於ける書籍の板行

二 讀書法の目的

多数の書籍……書籍の辨別……讀書法の考慮……讀書法の要目

目次

第二章 書籍の選擇

一 選擇の必要……………一八

選擇の必要……………選擇不必要論……………讀書の目的

二 學修としての讀書……………二二

復習……………學修書と参考書……………自修者の讀書……………第一流の書……………專修以外の書……………主件の心得

三 品性修養としての讀書……………二七

聖賢の書……………永久の書、一時的の書……………修養と多讀……………卷を開けば益あり……………多讀と專讀

四 常識修養としての讀書……………三〇

常識と讀書……………一時的の著書……………新聞雜誌と常識……………地理と歴史

五 娛樂としての讀書……………三五

多讀濫讀……………讀書の快樂感……………讀書の趣味……………ハイソソの三則……………其の補遺

六 選擇の一般概則……………三九

讀書の日課……………課程の必要

第三章 讀書と注意

一 注意の要件……………四三

注意とは何ぞ……………外界の刺激……………讀書の季節……………身體の威儀……………決心……………反省

二 專心の工夫……………四七

注意の特色……………受動注意……………發動注意……………音讀……………反復……………興味……………第二受動注意……………讀書三昧……………讀書四要

第四章 讀書と記憶

〇一 記憶の心理……………五二

記憶作用……………記憶の三過程……………注意と記憶……………理解と記憶……………筆寫法……………語記法……………記憶の選擇……………興味と記憶……………句調と記憶……………記憶の法則

〇二 記憶の方法……………六〇

觀念聯想と記憶……………符號的記憶……………假構的記憶……………假托的記憶……………換數的記憶……………人工的記憶の可否……………閃點……………引線……………貼紙……………記入……………備忘錄……………抄記法

〇三 記憶力の養成……………六六

腦力身體と記憶……………腦力と記憶……………讀書家に関する注意……………靜坐と記憶……………靜坐法……………思考と記憶

第五章 讀書と思索

〇一 思索の必要……………七二

坑夫と讀書家……………忠實と眞面目……………疑と悟……………讀書と努力……………之を思へ……………自家の力量と讀書……………水を習ふが如し

〇二 研究と思索……………七七

觀察と實驗と讀書……………觀察實驗の必要……………ロツクの讀書法……………撮要法……………分解法……………研究的讀書……………會讀……………下問請益……………白石の逸話

〇三 修養と讀書……………八六

文字以外の文字……………自家身上に理會せよ……………體讀……………古人と比較……………ゲーテの名言……………中村の讀書箴……………思索の順序……………自警條目……………靜坐と思索……………感想錄

第二篇 讀書と自修

第一章 讀書と作文

一 作文と思索

眼光紙背に透る……思想の獲得と思想の發現……文法語法……文の源泉……作文三昧

二 作文としての讀書

讀書の二方面……文字を知る……博覽……文の諸語……歐陽公の教訓……讀書に勞して作文に逸す……七八の讀書二三の作文……アヤソンの語……代表的著作……第一流の作……時文の大家

第二章 讀書と外國語

一 原作と翻譯

外國思想を窺ふの三法……科學上の翻譯……文藝上の翻譯……漢和文譯例……和漢文英譯例……外國語學習の必要……翻譯は臨寫なり……翻譯の必要……譯書の撰定……世界の言語……アールヤ語系……英語研究

二 外國語の自修

外國語研究の二目的……自修難……自修の可能……開學奉始……語學研究の注意

第三章 書籍の分類

一 泰西名著の選定

書籍の類別……ラボックの百書選定……ラスキンの評言……泰西四十名著……エリオットの選定

二 和漢名著の選定

經典……二十一史……百家九流……入門の書

上堂の書……入室の書……讀書矩の評……現代の書籍

三 書籍の整理……………一六三

頭字分類法……時代分類法……學科分類法……學科の分類……問題分類法

第四章 讀書雜訓

一 書籍の鑑賞……………一七四

圖書館の門扉……プラトーン……高と武王……リチャード・バーリー……メトラルカ……チヨースー……マツコレ……楊循吉……高士廉……夫茶樂事

二 讀書と活學……………一八〇

散漫に流る……黃山谷……終あらしめ……學者の偏倚……讀書以上の事……足代弘訓の自警……三浦梅園……

活學の工夫

第三篇 自修の實驗

第一章 自修と學修

一 自修の功過……………一八六

學問の活用……學問と常識……自修と常識……自修と學識……偉人と自修……ラホックの自修論……自修の順序……變則……二種の事情……自修者の失敗

二 自修の規則……………一九三

興味……中村敬宇……間斷なき修養……賴山陽の刻苦……意志の強固……自修規則……勞苦を辭せず……方向の一定……課程……時間の嚴守

第二章 自修と苦學

一 古人の苦學……………101

世事百談……………ジョンソン……………ゴールドスマス……………フラン
クリン……………二宮尊徳

二 苦學の成功……………108

リンコリン……………ワシントン傳……………木片を燈火とす……………正
義の眼……………勝海舟……………店頭に書を讀む……………辭書を手寫す
……………深夜兵書を寫す……………幕末の偉人……………逆境の修養

三 爲學の精神……………116

直接興味……………目的と手段……………間接興味……………苦學の意義……………
……………爲學の精神……………伊藤仁齋……………道を知り道を行ふ……………大
道の體現

* * * * *

附錄 社會教育論

一 社會教育とは何ぞ……………1

二種の意義……………相互の教育……………家庭、學校並に社會教育……………
……………社會教育の困難

二 社會教育の範圍……………3

智育的方面……………美育的方面……………德育的方面……………宗教

三 社會教育の目的……………6

社會……………社會と教育……………其の目的……………社會教育の誤解

四 社會の三大機能……………9

國家組織……………國家と教育

五 社會教育の變遷……………11

宗教と教育との分化……國民教育と宗教……武士教育

六 社會教育史の瞥見……………二四
講談落語……心學……道歌……發句……新聞雜誌

七 社會の心的方面……………二〇
社會の基礎……社會發生の力

八 社會心理と教育……………二三
暗示……理解力の粗雜……模倣……社會教育と模倣……
心的潮流……地方精神

九 専門智識の通俗化……………二九
科學智識の通俗化……趣味の向上……德育と社會教育

十 社會教育と興味……………三三
興味……興味と社會教育

十一 演劇寄席の影響……………三四
興味と感化……想像外の影響……演藝取締……如何なるものが行はるゝか

十二 演劇寄席の改良……………三六
藝人……藝人教化……脚本……改良の必要

十三 新聞雜誌の勢力……………四二
新聞の勢力……社會上の一大勢力……新聞と教育

十四 社會教育と文書……………四五
通俗と興味……教育と營業……代價

十五 社會教育家の苦衷……………四八
講談者の注意……人格

目次終

讀書法

加藤咄堂 著

第壹編

讀書の方法

第壹章

讀書法の必要

一 書籍の歴史

一 兎野にあり人争ふて之れを追ふ、數兎市にあり、人得て顧みず、其の得て顧みざる所以のものは多くして得易きに存し、其の争ふて追ふ所以のものは少くして得難きにあり。書の少くして得難きに苦みしは昔の夢、今は寧ろ多くして得易きに惱む時代である。請ふ先づ昔の夢を辿りて其の少くして得

讀書法の必要

文字

難かりし古人苦學の跡を思ひ、彼等が讀書に關する訓誡を顧み徐ろに現代讀書の指針に及ばしめよ。

人智の發達して漸く野蠻草昧の時代を脱せんとする時に當り、初めて言語以外に自己の思想を遠隔の地に傳へんとする方法を案出し或は繩を結びて其の意を示し、或は形象を模して其の義を寓す。此の結繩象形は則ち文字の源流にて初めは山川草木日月魚鳥等の形象を模したる象形文字(Hieroglyphic)にて古代支那并に埃及の文字は繪畫と相距ること遠からざるものなりしが、それより漸次進んで今日一般に使用する記號文字を形成するに至つたので、文字の便不便は直に其の國の文運を卜することが出来るが如く其初めに於ては、文字の有無は直に以て文明と野蠻との境界線とするを得るので、全く文字を知らざる野蠻人が、突然今日文明人の使用せる文字に接した時に、之れを以て奇怪至極の魔物とするは當然でジョン・ウイリヤムの談話なりとしてテローの著書に引用せる一話に南米土人に傳道して居つた或る宣教師一日小屋を修復しつゝ定規を忘れ來りしに氣付き木片に消墨もて定規を渡すべき由を認め

之れを土人に託して妻の許に持ち行かしめしに、妻は其の文を読みて直に定規を出せしかば土人は大に驚きて文字を以て言語を發するものとしたといふことがある、文字は實に人類の一大發明で之れあるが爲めに吾等は能く前人の思想を窺ひ其の智識を繼承することが出来る。此の文字が單に通信に資する爲めや記憶に便する爲めのみでなく永久に傳ふる目的に於て用ゐらるゝに至りて此に初めて書籍の性質を帯び來る、されば最初の書籍とも目すべきものは宗教上の箴言又は律法を永久に傳ふる爲めに永久に傳ふるに足るべき石若くは瓦に彫り付けて後昆に垂るゝに萌したので、現に近世に至りて發見せられたカルデアの書籍は磚瓦の両面に楔形文字を彫刻したるものにして長さ一呎乃至十二呎厚さ一時餘なりしといひ、下て希臘羅馬の時代に至つては象牙又は金屬の平板を用ゐ、後には木板の内部に蠟を塗リステラス(Stylus)といふ錐の如きものを以て彫り付けたのである、この木板の二枚又は三枚を針金にて結び開閉に便なるやうに爲すに至つて稍々書籍の形態を具備し此の形態の書籍は中世に至るも歐羅巴に於ては尙ほ諸所に用ゐられ、現にフロレンス

の博物館には一千三百〇一年の製作にかゝる此の蠟版の書籍を藏せりといふ。此の木板に次で棕櫚の葉又は菩提樹、楓樹、榆樹、秦皮樹等の内皮を用ふることとなりしが、是等の樹皮の用ゐらるゝと共に、最も早くしてしかも中絶したりし埃及のパピルス(Papyrus)といふ水草の皮は使用せられ、終にペーパー(Paper)なる名を以て今日の紙を指すの素地をなすに至つた。此のパピルスは埃及に於ては早くも紀元前二千年の頃既に之れを用ゐる寺院の内には此のパピルスに書かれし書籍を集めしが其の歐羅巴に傳はりしは希臘最古の史家ヘロドタスの時代即ち紀元前四百八十年の前後にして希臘にては一尺前後の長さのものを用ゐ、羅甸にては一尺六寸其の最も長きは三十尺に達し巻物として保存せられ書籍の形態は彼の蠟板と頗る異なるに至つた。此のパピルスに書くには木炭を以て色素を加へられた護膜の水や木から出る樹脂を以てし時としては鳥賊の墨汁や葡萄酒の殘滓の煎じ出したのを用ゐたらしいと傳へられて居る。これに次で用ゐられたりしはパーチメント(Parchment)と稱するものにて獸皮を以て造られ普通羊や犢の類を用ゐるしが故に一般に羊皮紙として知られ

パピルス

羊皮紙

るので是亦古くより小亞細亞地方に行はれ彼のヘロドタスの時代に於ても同地方に用ゐられしが、歐羅巴に於て之れを用ゐるに至りしは七世紀の頃にて初めは片面のみを用ゐる後には両面を使ふこととなり、主として巻かれ、時には折られて用ゐられしが十世紀の頃に木綿より紙を製することを發明し、十二三世紀の頃に麻布を以て紙を製するに至りて書籍の形態稍々整ふに至つた。併し是等の時代には未だ印刷の術進まざりしが故に書籍は筆寫によつて傳へられたるを以て僧侶貴族若くは好奇者流にあらすんば之れを貯ふるものはなく、殊に中世の歐羅巴は戦亂相繼ぎて文藝は全く光を失ひ、書籍の兵燹に罹るものも少からざりしを以て其の缺乏甚しく十四世紀の終に至りて文藝復興の曙光ともいふべき古典研究の思想起りて第一に古書の蒐集となり、ペトラルカ、ボカチオ等の先覺者は幾多の辛苦を侵して各所の教會僧院を探り山河を跋渉して遠く歐羅巴以外に出で、これを得れば即ち筆寫して同好に頒ち、或は文庫を設けて蓄藏したといふ、其の困難は到底今日から想像せらるべき限りでなく、書籍の尊崇せられたことも亦到底今日に於て想ひ及ぶことの出

文藝の復興

來るものではない。されどこれは一部學者間のことで一般民衆はこれを以て贅澤品の如く思惟した。それは文學のことは全く無視せられ宗教のことも僧侶の口より聞くの外なき時代で、書籍は僧侶の傳寫によつて蓄藏せられ少しく立派に書かれた聖書は二千金でなければ得られなかつたと傳へらるゝほどであつた。

印度の書

上古より中古に至る西洋は此くの如くであつたが東洋も亦同じことで印度に於ては古く貝多羅といへる樹葉に鐵筆を以て書し、書し終つて墨汁を以て拭ひ其墨を浸ますの法行はれ、今も尙ほ其風を遺し廣さ二寸、長さ一尺七八寸の樹葉に長さ三寸より七八寸に至る鐵筆の一端尖りて針狀を爲せるものを以て書し中央に穴を穿ち糸を通して以て之れを結ぶ、佛者の經は貫線の義なりと解したのは書籍の此形態に基くのである。支那は文字の國で黃帝の時蒼頡之れを作り、筆は舜これを作れりと傳へるが矢張り古代は刀を以て文字を竹皮に刻み、之れを結ぶに韓革を以てしたるにて孔子の易を讀んで韋編三絶び絶てりとあるのは此竹書なりしに相違なし。後、竹皮に代ふるに縑帛を以

支那の書

紙と筆

てし書の長短により截りて以て事に便し、筆も亦秦の蒙恬に至りて初めて古製を改めて毛筆を製し、後漢安帝の時に至りて蔡倫初めて紙あり、史にいふ「古より書契は多く編むに竹簡を以てせしが、其用、縑は貴うして簡は重く、並に人に便ならず、蔡倫乃ち造意して樹膚、麻頭、敝布、魚網を以て紙として奏上す、安帝其の能を嘉みし之れより用ひざるはなし、故に天下は蔡侯紙と稱せりと、此蔡倫と時を同うして左伯なるものあり亦能く紙を製したと傳へられ、墨も亦此時代には略ぼ完備し書籍の形態も亦一變するに至つた。これ以前は竹簡若くは縑帛なりしを以て巻き物として保存せられしが此に至て折本の形式となり更に進んで今日の書籍の形態に近よつて來た。形態は同じであつても未だ印刷の術開けず筆寫のみであつたから彼の秦の始皇帝が天下の書を焚いた後は、さしにも榮えたる周末の學術も一時中絶の姿となり、其の書籍も多く散亂して蒐集し難く、漢の代に至りて之れが復興を計り、漢代の學者は實に此の書籍の蒐集にのみ腐心して居つたといふても差支はない。後漢以後佛教渡來するに及び印度書籍の輸入となり、信仰の念は佛典を尊崇

し、研究の心は佛典の要求となり、彼の唐の玄奘三藏が山河萬里、葱嶺を越え流沙を渡り身命を賭して遠く印度に入つたのも其目的は印度書籍即ち梵本を得んが爲めに外ならなかつた。古人の書籍を得るに困難したりしは此の一例にても明かである。

印刷の術は早くから支那に開けて石に彫り、木に刻むの風は存せしも木板を以て書を刷するは隋の時代に初るといふ、これには異説あつて唐の世になつてからであらうとも傳へらる、若し隋とすれば時は西暦六百年の初め、唐の時としても七八百年代であるから歐羅巴に於ては未だ手書の外には其法を知らなかつた時代である。歐洲に印刷術の行はれたのは十四世紀の末、十五世紀の初めでセニョーポの文明史に據ると十五世紀の初め和蘭陀にて聖像並に宗教書類を多數に作らんが爲め文字を木板に彫り墨汁にて白紙に印刷する方法を創め、從來手寫の法に代へて大に廉價に供給することを計つたのを初めとせねばならぬから支那より遅くるゝこと遙かである。刻書の事は支那は歐洲より先だちしも印刷術の進歩は遅々として進まず活字の如きも紀元千

印刷術の發明

二百年の頃に於て早くも支那には陶器製のものをを用ゐ、次で金屬製の活字を製せしが今日の活字の如く直に紙に印刷するものにあらずして樹脂若くは蠟板に刻し、それを臺として紙に印刷すること木板と同じかりしを以て活字に於てさほどの利便を感せず、之れに反して歐羅巴に於ては一千四百三十六年にマインツの人グーテンベルヒ、鉛とアンチモニーとを以て金屬製の活字を發明して、初めて聖書を印刷し次でストラスブルグの人シエーフェル之れを改良して活字を鑄造せしより其の利便を感ずること深く書籍の傳播速かとなり、印刷の術も亦其後幾多の改良を経て長足の進歩を爲して今日に至つたのである。

我が國には多少の創意はあつたが大體に於て筆紙墨とも支那からの輸入にしてそれに書くべき文字も亦支那輸入なるを以て書籍の體裁も亦支那と異なることなく、貞丈雜記に

書籍を幾巻といひ又巻の一卷の二などいふことは、上古には紙なかりし故、竹を割りて火に炙りて油をぬき、其わり竹に漆にて文字をかきて韋にて編

日本の書籍

讀書法の必要

みつらねて巻き置し故、幾巻といひしなり、又一篇二篇といふも、編みて置きし故なり。篇はあむとよむ字なり、書籍を作ることを書をあむといふも右の事より起りたる詞なり、其後紙をつぎて巻物にするも右の趣をまなびたるなり、巻物はよむ時くりひろげて便り無き故、折本、とち本にするなり、とち本なれども猶ほ古の趣を以て幾巻とも巻の一などともいふなり。と云へるはこれ支那に於ける書籍形態の變遷にして我が國へは既に紙冊となる時代に入せられたるにて本國なる支那が筆寫の時代は矢張我が國も筆寫なりしは云ふまでもなく、支那に於ては既に刻書の行はれた後も我が國には主として筆寫が行はれ、殊に佛教の輸入は佛典の尊崇となり、其筆寫を以て功德あるものとし寫經のこと盛んに行はれ、佛典以外の書も多く唐本のみにて得易からず、史記の如き大部の書も筆寫したりと傳へらるゝのであるから其困難想像するに餘りあり、加ふるに其の筆寫に使ふべき用紙も頗る不足したるを以て一たび用ゐし紙の裏に寫せしこと珍らしからず有名なる紫式部の源氏物語も初めは寫經の裏に書かれたと傳へらるゝほどである、平安朝の

寫經

讀書の困難

末鎌倉の初めに至ては刻書のことも行はれ法然上人の撰擇集などは板行せられたことが明かである、其後世は干戈倥傯人は兵馬に疲れて讀書の人も多く見る能はざりしを以て書籍の板行思ひも寄らず、文學の權は全く僧侶の手に落ち不立文字を標榜したる禪僧はしばしば支那と往來して彼の國の書籍を齎らし、足利氏の代に當りて五山の僧侶盛んに板行を企てゝ世にいふ足利版と書する書籍を遺せしも、僅に僧侶縉紳の中に於てのみ所藏せられて未だ一般民衆の手に渡らず、讀書の困難は實に甚しく志あれども讀むに書なく書ありとも學ぶに師なきの状態にて臥雲の日件録によれば筑紫の人大椿は四書五經の講義を聽かんが爲めに常陸に赴きしといひ、江村專齋の老人雜話によれば元龜天正の頃には京師に於て四書の素讀さへなすものなかりしといふ、讀書の困難此の如く一般民衆も書に志すもの少かりしが徳川家康、覇を江戸に樹てゝ大に文教の興隆を計り藤原惺窩林羅山を擧げしより漢籍の輸入從て多く、書籍板行のことも亦大に奨励せらるゝに至つた。翁草に

書籍の事、慶長の國初までは皆な寫本にて僅に傳り來りしを神祖家康を

讀書法の必要

指す林家に命せられ、或は其道々の人に穿鑿技合を仰付られ、神儒佛の諸經を初め、あらゆる和漢の書籍を梓行せらる、此聖功幾許ぞや、さればこそ二百年來日本の學文大に募りて追々學者出で末書を編録し、其風、世に蔓りて無益の雜誌までも悉く開拓して世に充滿せり、是故に婦童までも物を辨ふるは偏に國恩にあらずや

といへるは少しく過褒の嫌はあれど、書籍の印行が徳川時代に至つて初めて隆盛を極めたるは掩ふべからざる事實である、併し尙ほ交通の利便今日の如くならざりしを以て支那書籍の輸入も其の數少く學者の書を愛惜すること甚しく一書を得る毎に傳寫して帳中の秘と爲したる如き逸話頗る多く藤原惺窩の人に與へし書面の中に、此頃文章軌範手に入り、遂に多年の本懐を遂げ、門人中にも寫させ申悦入、とあり林羅山は圖書篇を手に入れながら無しと稱して其の師惺窩に貸さざりしを以て非道人なりと云はれたなぞは有名な話である、後には文運大に勃興し漢書の翻刻も行はれて益々利便となりしも、唯だ洋書に至りては徳川氏は其の輸入を禁じたるが故に志を立て、之れを讀ま

んとする人々の苦心は懦夫をして起たしむる美談が少なくない、これを今日交通の便開け印刷の術盛なるに比して其の差霄壤のみではない。

二、讀書法の目的

維新以後西洋の活版術我が國に使用せられて支那西洋の美所長所を製本の上不及ぼし、書籍の板行日に盛んに外國書の輸入も亦頻りにして書籍の不自由は殆んど無しといふも差支はない、明治三十九年の統計によれば一年間に出版せられたる書籍部數は貳萬八千三百十九冊、尙ほ年々増加の傾向を有するのであるから今日に於て新刊のみを讀まんとするも一日約七十七部の書を讀破せざるを得ず帝國圖書館現存數は廿二萬八千八百廿九冊これも亦年々増加するのであるが、假りに此數に止るとするも一日十冊の書を讀破するとして尙ほ二萬二千八百八十三日即ち六十三年を要し、若し日課一冊と定めんに六百三十年を要す、これもとより企及し能はざること、吾等は實に今は書の少きに苦まずして多くに苦むのである、得難きに苦まずして得易きに苦

むのである、古人が山河幾百里、書を求めた困難には比すべくもないが、此の多數の書籍の中に立て何れを手にせんかを定むるも一つの困難である、我が生は限りありて讀むべきの書は限りなし吾等は先づ此の多くの書籍の中より正に讀まざるべからざる書と讀むを要せざる書とを辨別せざるべからず。

唐彪の讀書作文譜にいふ、

當に讀むべきの書あり、當に熟讀すべきの書あり、當に看るべきの書あり、再三細看すべきの書あり、必らず當に備へて以て查考に資すべきの書あり、書既に正あり、問あり、正經の中、精庵高下あり、急需不急需の書あり、故に五等の分別あり、學者苟も當に讀むべきは何の書ぞ、熟讀すべきは何の書ぞ、當に看るべきは何の書ぞ、熟看すべきは何の書ぞ、をか分別せずんば則ち工夫緩急先後俱に誤る、考究に備ふべきの書に至ては苟も之れを備へざれば則以て查考することなし、學問智識何によりてか長せん、と、書籍の選擇は讀書法の劈頭に來るべき注意にして一步を誤れば精神を徒勞し時間を空費す、さて暫く好書を選択したりとするも今日の如く印刷術の

書籍の辨別

讀書法の考慮

進歩し出版の頻繁なる時代には其の當に讀むべきの書も益々増加して僅に一科目に關する著書のみにも其の數日に増し月に加ふるが故に一書未だ讀み了らざるに他書又出づ此際に處しては單に如何なる書を讀むべきかを定むるのみを以て足れりとせず、更に如何なる方法を以て讀むべきかを考慮せざるべからず。世には再三再四熟讀しつゝ而かも其の要領を得ざる人あり、僅に一瞥したるのみにて直に其の要領を得る人あり、さればデスレリーは吾等は如何なる書を讀むべきかよりも、如何なる方法を以て讀むべきかといへる技術を心得るの必要を感ずといひて實用的なる讀書法を望みしといふ吾等の讀書法は此點に於て考慮し更に一步を進めて如何にすれば其の讀み得たることを記憶し得べきを考慮せざるべからず漫に讀過したりとも深く心に印して永く之れを把住するなくんば讀むこと多しと雖もそは目に讀みたるのみにて何の功なし、目に讀むは讀書の末なり、之れを心に讀んで初めて功あり、されど唯だ心に印したるのみにて之れを實地に活用する能はずんば、こも亦功なき讀書法にして書齋の如

讀書法の必要

き死學者たるに了るべし、眞の讀書は其讀み得る所を消化し咀嚼して自己の所有たらしめざるべからず、ジョン、ロック此の死的讀書を戒めていふ、
 讀書は唯だ知識の資料にして知識其者にあらず。思考の力を假りて之れを分類し歸納して初めて知識となること猶ほ食物の消化を俟ちて始めて身體の營養となれるが如し、

と、讀書法の目的は書を讀んで自己の用たらしめんとするにあれば彼の徒らに多讀に誇りて何の得る所なきは暴飲暴食自ら胃腸を害するものと一般讀書の目的に適ふものにあらず讀書法はこれらの弊を避け健全に自己の營養たらしむるものにして彼の徒らに書を尊び書を崇めて自ら其の奴隸に甘んじ若くは思想傳播の具たる書籍を一種の裝飾と心得妄りに架上の美觀に誇りて其の眞目的を忘るゝ痴態を排し、眞に書籍として書籍の目的を有功に貫徹せしむるを期するにあれば、書籍を以て知識の寶庫なりと稱するを許さば、讀書法は實に之れを開くの鍵である、

讀書法の要目

一 如何なる書を讀むべきか、

二 如何なる方法を以て讀むべきか、

- イ 如何にして理解し得べきか
- ロ 如何にして記憶に存せしむべきか
- ハ 如何にして自己の有たらしむべきか

これ實に讀書法の研究せんとする要目にして今日に於て殊に最も必要なるを思ふ、勿論古代といへども讀書法の必要なりしは古人もしばく之れに論及し悉く書を信すれば書なきに如かずと云へるほどなれど書を得るに苦しかりし昔は其の傳寫せらるゝの書は多く聖賢の遺書にして價値なきものは遺存すること少く、求むるものも亦なかりしを以て漸く得たる書を専心細讀する上にこそ多少の心得はあれ、其他に於ては多く云ふを要することなかりしも書籍板行の盛なる今日に於ては讀書法攻究の必要其最も切實なるを思ふのである。

第貳章 書籍の選擇

一 選擇の必要

適者生存は自然の理法にして人事も亦此の則を脱せざれば、既に説きし如く書籍の乏しき時代に傳誦せられ騰寫せられて永く後世に遺りしものに價値なきは少く、多くは聖賢の遺著にして世を益し人を利するものなれば書を讀む一卷、一卷の利あり、書を讀む一日、一日の益ありと見て讀書を以て全然無害のものと認むることも出来て不當のことではなかつたが、尙ほ其の時代に於ても達人は悉く書を信すれば書なきに如かずと訓誡して書籍選擇の必要を云へるほどなれば、今日の如く書籍の數も多く書を得ることも難からず、殆んど吾等をして書籍堆裡に身を埋めしめんとする時代に於ては書籍の選擇はど必要なことはない。現今世界に存する書籍の數は約三十億萬卷、これを僅か五十年や七十年の生涯の中に讀破せんこと思ひも寄らず、僅に帝國圖書館所藏の書のみにて一時代に讀み了らなれば難きことなれば數量上の問題と

選擇の必要

しても讀むべき書と讀むべからざる書との選擇は自然に其の必要を告げ、更に性質上の問題として考慮すれば多くの書の中には吾等を啓發するものも少なからざれど、又吾等を墮落せしむるものもないのではない、よし墮落せしむるまでに至らずとも讀み去つて何の利益をも與へないものは吾等が日常目に觸るゝ書籍の中にも指摘することが出来るのであるから斯る書籍の爲めに貴重時間を徒費せんは恢復すべからざる生涯の損失なれば是非とも之れが選擇に意を用ゐねばならぬ。此の事は既に述べたる如く讀書法の劈頭第一の問題にて古來之れに心を勞するの士は訓誡怠らず、近世哲學の曙光を洩らしたるペーコンは書籍を分ちて一讀過すべきものと再三熟讀すべきものとに分てよといひ、同時代の哲學者たる有名のホッブズは若し予にして他人の如く多く書を讀みたらんには亦他人の如く無學なりしならんといひ、唐彪は人の書を看る先つ已むべきと、已むべからざるを分つべし。其の已むべきの書は解し易しと雖も必らずしも披閱せざれ。其の已むべからざるの書は極めて難解なりと雖も、必らず反覆して通ずるを求むべしと説き、我が國の古歌

選擇不必
要論

にもよくえらび讀むべかりけり世の中は、人まどはしのふみし多ければとありて選擇の必要を説かざるはない、併し之れに反對なる意見の有せるは彼の詩宗ミルトンが學者たらんものは凡百の書を涉獵せざるべからずと説きて多讀の利を説き、近世の奇傑雲井龍雄が手に觸るゝ所の書、何の選ぶ所なくとも一萬卷を讀破すれば必らず得入する所あるべしと傳ふる種類の議論にして、書籍を友に喩ふれば一は友は必らず擇ばざるべからずと説き他は友必らずしも擇ぶを要せず、多く交れば多くの利ありとするもの、二者共に理なきにあらず選擇にのみ心を勞して彼れも非なり此れも不可なりとして自ら交際の範圍を狭小にする如く讀書の範圍を狭小にして見聞に缺くる所あるは面白からず、古人も操守だに堅ければ如何なる友に交るも不可なしといひける如く、自己の本領を堅く持して、さて凡百の書を涉獵するは利あつて害なければ、本領其の爲めに紊され操守其の爲めに動かされて相識天下に滿つるも心を知る一人の友なきと同じ寂寥に陥るは悲むべきことである。專讀の利をいふも多讀の益を説くも、嚴重に選擇すべしとなし又は必らずしも選擇するを要せ

讀書の目的

すと主張するも要は其の立論の脚地を異にするので、其の是非を判ずるには先づ讀書の目的の萬人必らずしも同じからざるを看取せねばならぬ。讀書の目的にして一科の專攻にあれば多讀は利なけれど常識の修養にあれば多讀も亦咎むべからざる場合がある。

會て修養論の中にも説きたる如く、讀書の目的には自ら四種の別がある。

- 一 學修の爲めに讀むものにして主として専門の學科に限らる。
 - 二 品性修養の爲めに讀むものにして主として聖賢の書を求む。
 - 三 娛樂の爲めに讀むものにして主として文藝の述作にあり。
 - 四 常識修養の爲めに讀むものにして主として智識の涵養を目的とす。
- 今此の一々につきて聊か其の標準を示し次ぎに概則を提供することとする。

一 學修としての讀書

學修の爲めに讀むものにも亦自から二種ありて一は師に就きて研究する所を復習するものと、他は自ら專修の學科を定めて獨學せんとするものとであ

る。師に就きて研究する所を復習するには其の學び得たる書籍を反覆熟讀し其の意を體得するにあれば敢て選擇を説くの要なけれど一切の學術は唯だ師に學びし所の書籍のみにては研究の範圍狭く應用の區域限られ其の學說も亦多く一方に偏して充分に其の學ぶ所を咀嚼すること能はざるものなれば必らず其の學修書以外に参考の書を自修せねばならぬ。若し此の自修の勞を厭ひて一意其の學ぶ所のみ反覆する時は師の學を繼承することは出来ようが自家得力の處とは少しもなく、且つ異説を多く窺はざるが故に何が故に自家學ぶ所の他の諸説に優るかも知ることも出来ず、従つて其の學ぶ所を以て全く自己の所有たらしむることなく、師の蓄音器となり、書籍の奴隸となつて荀子の所謂小人の學は耳に入て口に出づ、口耳の間即ち四寸のみ、曷ぞ以て七尺の軀を美せんや、徒らに口耳四寸の學となつてしまふ。業を受け學に就くものも唯だ其の教科書を誦讀するのみでは充分に力を養ふことが出来ない、別に博く諸書を参照し諸説を考駁して以て自家獨發の想を養はねばならぬ。併し幸に師に就き業を受けて居るのであるから其の参考とすべき書籍の選擇

復習

學修書と参考書

は師の教示を待つを便利とする。師は我に就ては少くとも一日の長はあるのであるから自然我よりも多くの書を見て居る筈である。我よりも多く見たる人の選擇に従つて無用の書の爲めに無用の時間と無用の勞力を費すの愚を避けねばならぬ。かくて書籍は選擇せらるゝとも讀書の方法に就ては學修書と参考書とは其の趣を異にし學修書は根幹にして参考書は之れを培ふの肥料たるに過ぎねば一は熟讀玩味し再三反覆せざるべからざれど他は一應目を通して其の學ぶ所を補ふの要に供するを學修當時の讀書法とす。更に具體的に云へば學修の書に對しては豫習、學習、復習の三を要すれど参考の書は其の復習の際に於て閱讀するを以て最も當を得たる方法とするのである。

自修の場合に於ても先輩に就きて其の讀むべき書籍の選定教示を受くるを最も當を得たるものとする。併し其の選定教示を受くべき先輩だにもなき場合に於ては勢ひ自ら選擇せざるべからざれば其の不便此上なけれど、常に其の學科に於てオーソリテイとなるべき第一流の書籍を選びて第二流第三流に屬するものを避くるを以て失敗なき選擇法とす、例へば生物進化論を研究す

自修者の讀書

るとせば先づ第一にダーウキンの生物始源に眼を注ぎ、之れによりて斯學の根底を養ひ、漸次爾後の著述に及ぶとか、日本史を研究せんとするには大日本史によりて概念を養ひ、更に進んで其の史料たるべき諸書に入ることであるが、併し其の人の學力によりては直にオーソリテイとなるべき書籍を読むに不便を感じるものもあるから、其の時には自己の讀み得る範圍の書に於て第一流と認めらるゝものに就くを可とするので、前例を繰返せばダーウキンの生物始源でも英文は讀み得ないとすれば邦文の書籍に據る、それも亦適當な翻譯書なしとせば邦文著述の中の第一流と目せらるゝ書に就く、さて其の第一流の書も難解なりとすれば通俗講話になりたるものゝ中にて最も價值あるものを選ばざるを得ず、大日本史は讀み難しとすれば國史眼によるべく、こも亦平易ならずとせば中學程度の教科書若くは講義録による等其の人の力に應じて一定し難けれど、少し困難なりとも、第一流の書を読むことを努めなば進むこと遅々たりとも得る事頗る多く、二流、三流の書は一瞥の下に其の價值を判するに至る。これ自修者書籍選擇の最要件である。然るに人の

第一流の書

心は何につけても難を避けて易に就くの傾きあるが故に、第一流の難きを選び、二流、三流の易きに就き讀むこと多くして然かも得る所少きに至るは自修者のしばしば陥る弊竇である。第二流第三流乃至第四流第五流の書を読まんとするから其の數愈々多くして選擇にも苦むのであるが、第一流の書は世間に其の數多いものでない。哲人エマーソンが曾てボストンの大圖書館を訪ひ、其の書架に陳列せられたる無數の書籍を見て此の如く莫大なる書籍の中に何れが果して善良なるものなるか、想ふに其の最も善良なるものは僅に我が書齋に備ふる四百卷に過ぎざらむと云ひける如く第一流の書といふものは必ずしも多々あるのではない。殊に專修の學科に就ては其の數も限りあるものなれば先づ此の限りある少數の書を熟讀して一步一步源に溯り底を探つて行くのが專修者の心得である、學科の專修には多讀を要せずして寧ろ價值ある少數の書を咀嚼するを必要とする。

學修と自修とを問はず、以上述べた如く專修を目的とする讀書家は少くとも其の專修當時に於ては專修以外の書を讀まざるを以て必須の條件とする。

專修以外の書

何事も専門となると面白からずして却つて他の學科を羨むの情があるものであるから手を専門以外の書に着けると其の爲めに心を奪はれて専修學科の研究を疎略にするを免れざれば成る可く専門以外の書を選び、自己の本領を發揮することに努め、終に其の専修學科に多大の趣味を感ずるに至るべし。拙著修養論に一語を載せていふ。

山陰に一老儒あり、青年の笈を負ふて東都に學ばんとするを送りていふ。汝が成功の訣他なし、學修の間、希くは専門以外の新聞雜誌を見る勿れと、青年以て頑迷の語となし東都に入るに及びて雜誌店頭諸種の新聞を獵り、朝夕新聞に親みて學業に専らなる能はず。終に志す所の學科を放擲して校を轉ずること再三、蹉跎落魄、同學の士の成功を羨み今にして老儒の言の迂ならざりしを思ひしと、老儒の言は少しく過激なれど客氣未だ定らず、志未だ堅からざるの徒が世に媚び俗に阿る新聞雜誌の記事に動かされ、或は煽動的なる時事の評論に慷慨して自己の學習をもどかしとして中途に業を廢し終に生涯の方針を誤るもの多きは其の例に乏しからず。

主伴の心得

と。されば専修を目的とするものは其の學科に必要なもの、外、暫く他の書に觸れざるも心得べき一種の讀書法である。併し専門以外の書籍の中に思ひも寄らぬ自己専修の學科に資すべきことの掲げられ、時事報道の新聞の中に見逃すべからざる材料の載せられざるにあらねば一概に之れを排斥するは偏狹の見を免れず、唯だ能く其の主とする所を主とし、伴とする所を伴として、伴の爲めに主を忘ることなき讀書法こそ最も適當なれといふべきである。

三 品性修養としての讀書

品性修養の爲めの讀書も亦専修を目的とする讀書の選擇法と同じく第一流の書を選ぶべきは勿論にして坊間雨後の筍の如くに出づる雜書よりは古人の依て以て修養に資したる聖賢の遺著を精讀し例へば一卷の論語一卷の聖書を座右の箴とし閑あらば繙き隙あれば開みし自己をして其の書に同化せしむるに至るの時に於て功あるのである。朱子の讀書法に

聖賢の書

書籍の選擇

尹先生が門人言く、尹先生書を讀む時にはいふ耳順ひ心得れば己が言を誦するが如し功夫到て後、聖賢の言語を誦すれば都て一に自己の言語に似たり、

と、聖賢の言語をして自己の言語と一たらしむ此の目的に對する讀書の功此に擧る、朱子いふ。

讀書須く讀で舍つるに忍びざる處に至て方に是れ真味を見得す、若し之れを讀む數遍畧ば其の意を曉れば即ち之れに厭て別に書を求めて讀まんと欲す、則ちこれ此の一卷の書に於て猶ほ未だ趣を得ざるなり、

と、徒らに新らしきを求めて未だ其の讀む書に於て舍つるに忍びざる處に至らざるは聖賢の書を讀む所以でない。

品性修養を目的とするの讀書は其の書籍を以て自己の良師友とし好伴侶とせんとするものなれば一たび其の選擇を誤る時は偏僻なる意見に溺れ奇矯なる思想に驅られて自己の生涯を誤るに至るを免れざれば、其の書の選擇は之れを自己の尊重する先輩に諮り若くは先人の著述に依りて定むるを以て最も

穩健なる方法とするのであるが今暫く其の選擇の方針を示せば世間に行はるる書籍の中には一時的のものと永久のものとなつて、一時的のものは其の時代に於て自己の感想を吐露する爲めに著はされたのでカスライは之れを以て讀者と一々對話するの不可能なるが故に便宜上出版したものにて嚴密なる意味に於て書籍と稱すべきものにあらずとし、眞の書籍は永久に傳ふる目的を以て著はされたものならざるべからずと論破した、此の眞の書籍こそ吾等が修養に多大の効果あるものである。徒らに一時の興味に驅られて一時的の書籍にのみ耽り、此の永久の書籍を逸しては却て利を得べき書籍より害を招くことがないとは云へぬ。世間一と通りの交際をして行く友人なれば如何なる者でも自己の操守さへ堅ければそれで差支ないが、自己の好伴侶とし良師友として行く友人の必らず擇ばざるべからざるが如く品性修養に關する書籍の選擇は忽にすべからざるものである。

併し同じ品性修養に資するにしても矢張主となるべきものと伴となるべきものとある、以上述べたのは其の主とすべきものであるが其の伴とすべきも

修養と多

巻を開け
は益あり

多讀と專

讀書の方法

のは一切の著書何物か自己の修養に資せざるものあらん。一俚諺の中にも人情の微は伏し一稗史の中にも修養の材は藏る、彼の雲井龍雄が讀破一萬卷以て見識を養ふべしといつて多讀を勧めしも此の見地の上からである。昔は宋の太宗、詔して太平御覽一千卷を修せしめ日々三卷を讀破す、宋琪其の勞瘁したまはんことを憂へて之れを諫む、太宗聽かずしていふ、卷を開けば益あり、勞とせざるなりと、修養を資せんとして讀む何の書も皆な卷を開けば益あらざるはなかるべけれど、こは主としての讀書功を積み自己の本領略ぼ明になりたる後のことにて初めより多讀濫讀以て修養に資すべしとするは主客顛倒の謬見たるを免れぬ。朱子いふ。

精神長するものは博く之れを取れば得る所多し、精神短きものは但だ詞義簡易なるものを以て涵養せよ、

と、採て以て此の種の讀書法の箴とするに足る。

四 常識修養としての讀書

常識と讀

常識養成に關する讀書は又自から其の趣を異にす。常識は其の字の示すが如く、萬人普通に有せざるべからざるの智識にして専門的なる學識と同じからざれば一書專修によりて之れを養ひ得べきにあらず、専門以外の諸學科の大要を知悉すると共に世態人情の迂餘曲折をも察し、かねては時代の思想をも看取して自己をして同時代の各人の中に伍して遜色あらしめざらしむるを要するを以て讀書の範圍も亦廣からざるを得ず。僅に専門の書籍のみに没頭して其れ以外の何等の書をも解せざるものは世に立ちて不通の人となるを免れざれば専門の書は之れを熟讀し他の書は之れを一閱するに止るとも、其の一閱すべき書籍は百般の學科に亘らざるを得ず、もとより小學中學に於て常識の基礎となるべき學科の大要は之れを理會したのであるが、世は日々に駸々として其の歩を止めざれば學校に於て學び得たるのみにて捨て、顧みざらんか、去るものは日に疎く、會て學びしことも、自己の腦裏より消え去るのみならず、新發見新學説は相繼で現はれて、會て學びし當時には爲し難しとせられたことも今は爲し易きこととなるの類少からざれば時代の進運に伴はんと

する讀書は何人に於ても廢すべからざることである。

一時的の著書

さて此の目的を達する爲めの讀書には必らずしも永久性の著書のみに限らず、一時的の著書の中にも能く其の時代の思潮を代表せりと思惟せらるゝものなれば之れを繕きて以て時代の趨勢を看取するの必要はある。當代大家の講演談話の筆記も、其の感想言議も亦以て讀者を啓發するの材となる。よしカースタイルが聲音の運輸機械なりと罵倒せる著書とても此の目的を達する爲めには毫も差支はない。殊に専修的讀書の場合には利少しと見たる新聞雜誌も此の目的の爲めには最利最便のものとなつて社會日常の状態は殆んど一幅のパノラマとなつて吾等の目前に現はれ、思想の推移も、人情の變遷も、新事實の發見も、新學說の提供も、此の中に收めらるゝのであるから時代智識の涵養としては新聞雜誌ほど適當なものはない。併し此の新聞雜誌の中にも徒らに惡事醜行を摘發するに努めて其の以外に何等の功なきもあり、偏僻なる意見に驅られて不公平の報道を企つるものもあるから其の選擇は容易でないが。

新聞雜誌と常識

一 記者の人格の高潔なる事

二 記事の公平なること

三 報道の正確なること

四 趣味の廣汎なること

等を標準として選擇し、能ふべくんば一種に止らず二三種を閲讀して相互參照したならば大なる過誤はなからうと思ふ。

新聞雜誌の多くは通俗と平易とを旨としたるものなれば何人にも解し得べけれど、實際新聞全面の記事を悉く理解し得るは餘程常識の發達した人ではなげねばならぬ。三面記事の世事百態に隨喜して居る人々には到底第一面や二面の政治文藝記事は解らぬ。其の中にも政治に興味を持つ人には文藝の事は解らず、文藝に眼を注ぐ人には政治の事は解らぬ。それでは矢張常識に於て缺くる所がないとは云へぬ。されば其の常識を修養するには如何なる書を適當とすべきか、新刊の書は日に多くして之れを讀む時間には限りがある。此に於て吾等は實驗に徴して最も利便なる二種の書を推舉せざるを得ない。

○は地理書にして他は歴史である。曾ていふ、

讀書は實に常識涵養の第一要件にして、之を廢しては殆んど他に策を求むべからず、殊に地上の諸現象を網羅して洩すなき地理書を讀むが如きは實に常識涵養の捷徑なり、見よ、一卷の地理書の上には天文地文の狀態より各民族の政治、經濟、風俗、習慣、教育、宗教を記述して殆んど現代智識の全般を知悉せしむるにあらずや。地理と相關聯して吾人の常識涵養を助くるものは歴史なり。上下茫茫五千載、人智の發達、人情の變遷收めて一卷の中にあり、往を以て來を推し、今を以て古を量る、地理は空間的にして歴史は時間的なり、空間以外に物なく時間以外に事なし、吾人は専門の研究若くは一定の職業に執掌して常識涵養に暇なきの人士に對して此の捷徑あるを知らしむむるの必ずしも無用の冗言にあらざるべきを信す拙著「人格之養成」

此の地理歴史の書に就きてもこゝには專修を目的とするにあらざれば必ずしも第一流の書たるを要せず、第二流以下の書なりとも地理歴史の概念を與

ふるに適し且つ趣味深きものなればそれでよい。專修の場合に於ては趣味の如何を問はず必らず讀まざるべからざるの書として之を讀むべけれど、常識修養の爲めには趣味なきものは注意を與ふること少く且つ讀書に勞力を要すること多きを以て趣味深きものたるべきも一つの條件である。

五 娛樂としての讀書

專修としての讀書は其の初め勞力多く苦痛之れに伴ふとも努力して之を讀みて險路經來つて山光殊に美なるが如く、讀み讀んで其の學科に趣味を感ずるに至つて妙なるのであるが、常識修養的の讀書は初めより趣味なければ注意之れに動かす終に廢して他の書に移るの弊を免れず、吾等は是等の目的の讀書の外に單に娛樂を目的とする讀書あるを忘るべからず。凡そ世の中の娛樂といふものは皆な利害相半ばするものにて眞に利のみあつて害なきはないが、讀書のみは殆んど利あつて害なしといふも差支はない。古人が如何なる書を讀むとも害なしといふたのは此の目的の見地からであらう、多讀濫讀

の中にも専修學科を資する好材料の發見せられざるはなく、操守だに堅ければ如何なる書籍の中にも品性を助くる斷片を認むること少からず、常識を補ふの良資料のないではない。春日潜庵が

門を杜ぢ書を読み卷を掩ふて省察す、一室の樂これより善きはなし、これ少壯の業にして老大に至りて最も善し、若し夫れ門を出で、應酬し世を救ひ民を撫するも亦一室の中にありて既に了々然たり、後以て經世の業を語るべきなり。

読書の快
樂感の快

といひ、ラボックが、

吾人は書齋に静坐して萬國各地を經歷す、吾人は船長クックと共に或は、
一ウキン、キングスレー若くはラスキ、と共に地球を周遊し得べし、而してこれらの人々が吾人に示す所のものは吾人が親しく實驗するよりも詳細に亘るなるべし

といへるも共に讀書の利益と趣味とを説けるものにして吾等をして曾て云ふ所を繰返さしめば、吾等は

読書の趣
味の趣

人生不幸なるは讀書の趣味を解せざるより甚しきはなし、書齋に静坐して萬國を經歷し、一室に兀坐して古人と遊ぶ、まことやゼームス、シナリーが書籍を熟讀する時間ほど面白く且つ幸福なるはなしといひ、ジョン、ハインエルが若し如何なる場合にありても、手の周邊を離れず、一生の間幸福と愉快との源泉となり、又如何なる人生の悲惨に遭遇するも、猶ほ其の不幸を遠け、以て我が愁眉を開かしむるに足るの妙あるものを希ふものは讀書を選ぶの外なしといへる如く、吾等を慰藉し吾等を薰陶して其の憂苦を去り悲痛を除くもの讀書の如きはなし。多くの娛樂は對手を要す、されど讀書の快は獨り之れを擅にすべく、多くの娛樂は所を選ぶ。されど讀書の樂は車上たると机上たると枕上たると、室内たると戶外たるとを問はず翠滴る樹林の中も、月洩る伏屋の軒にても一卷の書は以て吾等に無限の快感を與ふべし(拙著修養論)

といふの適當なるを覺ゆ。既に娛樂を目的とす之れに對して讀むべき書と讀むべからざる書との選擇をいふは人の快樂に制限を付せんとする如く不當の

③ エマーソンの三則

ことに似たれど、同じ快樂にても不義不徳の行爲の制限せざるべからざるが如く、同じ讀書といへども趣味の下劣にして品性墮落を誘致するの書は斷じて避けねばならぬ、此の標準以外に於ては全く自由なりと雖も、尙ほエマーソンの設けたる書籍選擇の三則は、もと一般の讀書に就て立言せられたのであるが、殊に此の自由なる讀書に於て一顧を怠るべからざるのである、エマーソンの三則にいふ、

- 一 出版後、一年以上を經過せざる書を讀むこと勿れ。
- 二 有名ならざる書を讀むこと勿れ。
- 三 己れの好む所にあらざる書を讀むこと勿れ。

と、第二第三に於ては異議なければ第一の出版後一年以上を經過せざる書を讀む勿れといふは徒らに新刊の書に走せて價値ある古書を放抛するを憂へての言としては、さることながら新學説の提供に耳を傾けんとし又は時代智識を得んとするものに於ては必らずしも遵守すべき規則とは云はれぬ、澤柳政太郎氏の讀書法には其の闕を補ふて、若し同一種に屬する所のものにして新

其の補遺

古の二種あるときは多くは新書を選びべし、或は古書にして新書に勝りたるものなきにあらずと雖も、概して云へば新書は古書に優るものとす。と吾等は是の如きの標準に従ひ、各自の目的に應じて其の讀むべき書を選択せねばならぬ。

六 選擇の一般概則

以上は主として一々の目的に對する書籍選擇の指針を示したのであるが、何人と雖も幾分は専修の學科若くは自己専門の業務に資せんが爲めの讀書あり又單に常識を修養せん爲めの讀書あり娛樂に供せんとする讀書もあり、少し志のある人は品性修養に關する讀書も亦缺くべからざるものなれば、是等四箇の目的を一身に集めて書を讀んとするもの又は其の中の二三の目的を同時に達せんとする人は如何にして書を讀むべきかといふに、それには讀書に次第を設けて主伴を明にし主たる目的の爲めの讀書を第一とし伴たる目的の爲めの讀書を次ぎとし一日の中にも主なる目的の讀書には五六時間を費す

讀書の日

も伴なる目的の爲めには一二時間を費す等時間の長短を以て輕重を明にし、閑居して讀書を業とするものなれば朝起直に品性修養に關する書を手にして心神を清澄にし、さて午前午後の大部分を專修の書に費し、夜は常識修養の書又は娛樂の書を読みて心神を休養し、日間は業務の爲めに忙殺せられて讀書の閑なき人は夜間に專修の書を繙き、業務の閑なる土曜日曜のみ雜書を濫讀する等適宜に其の法を定めて主伴輕重を明にして行くのが最も便利である。是等は人々其の境遇と時間とに應じて定むべきことにて一概に論定し難きも要は課程を作りて讀むべき書を選びて順序次第を定め之れを嚴守して毫も怠らざるにあらざる。朱子曰く、

課程の必要

讀書先づ程限を立てざるべからず、程限は田の畔あるが如し、今の始學者此の理を知らず、初時甚だ銳にして漸々に懈み去り、終には因循怠惰、前功を抛棄す、只だ當初程限を立てざるの故に緣ると、唐彪更に細説していふ。

恒あるは是れ學人徹始徹終の工夫、唯だ恒あり、學業始めて能く成就す、

然かも人誰か恒あるを欲せざらん、而して毎に實踐する能はざるものは課程立たず、學、定規なく、初めの時に欠缺し久ければ即ち廢弛す、唯だ簡約の課程を立て遵守し易く一日も之れを缺きて怠惰因循を致さしめざれば方に能く恒あらん。大概は十五歳以内は毎日間四五時を取て讀書すべく、餘は散歩を聽るすべし、三十以内は或は有事、或は無事、讀書の外、靜坐最も要あり、散歩之れに次ぐ、三十以外、事繁簡あり、應事讀書の外、或は靜坐或は散歩、各々其の意に隨ひ、作文の日は專意して文を作るは斯の例にあらず、此れ昔賢課程の常式なり、讀書一頭に至ては資に敏鈍あり、一定の式たる能はず、故に又別に日記課程を設け以て準則と爲す、呂東萊曰く讀書最も當に課程を準立すべし、其時は其書を読み、其書を温ぬ、其時は其字を寫す、家常茶飯の如く先ならず後ならず時に應じて供せば自然に日計不足なるも月計餘りあらんと、

又いふ、

書、月日を分て温讀講解すれば則ち先後定序あり、多寡定規あり、自然に

精專深入、用力少うして得効多し

と、課程を作りて讀書の次第を定め之れに遵據するは讀書自修者の守るべき規則である。これを之れ定めず、一書未だ讀み了らざるに直に他書に移り思慮散漫、終日書を讀んで何の得益なきに至るは讀書子の避くべき弊である。されば一書閱讀中他書の讀むべきものあるを知らば之れを備忘録やうのものに記して豫定の課程終りし後に次ぎの課程に加ふるやうに工夫して行かねば到底讀書の効益を得ることが出来るものではない。

書籍の選擇に關しては二個の原則あり

- 一、書籍は完全にして缺點なきものたる事
- 二、書籍は各自に取り有用適切なるものたる事

リチャードソン

第三章 讀書と注意

一 注意の要件

注意とは何ぞ

眞の讀書は其の書の意義を理解して探て以て自己の用たらしむるにあり、唯だ器械的に目を書上に落すも心之れに向はざれば讀破萬卷するとも終に何の功なきに了るので、理解は實に讀書の第一目的である。此の目的を達せんとするには先づ自己の心をして其の讀む所に向はしめ之れに向て注意する所がなければならぬ。注意といふのは其の事を以て自己意識の中心點として他の一切を排斥する心的狀態で此の狀態に於て初めて讀む人の心と讀まるゝ所の書と結合して此に理解の素地を成すのである。心此にあらざれば見れども見えず、注意之れに向はざれば書中の文字は雲烟の如く眼を過ぎて毫も心に止ることなく、終日書を讀んで然かも書中の事を了せざるは全く此の注意を缺くからである。人は同時に二物に注意を拂ふ能はざるは心理學上の原則なれば、心に専らならずんば理解の素地は終に成すことが出来ないのである。

古人が人心軀殼裡にあらざるば如何ぞ聖人の書を讀み得ん」と喝破したのも此の注意を缺く讀書の益なきをいふたのである。

吾等の心は常に外、見聞する所のものに動かされ、内、思念する所のものに狂はされて變々化々雜念繼起して意識の流れ止ることなし。されば書を讀むの中、若し爆然たる音響を聽かんか注意は其の爲めに奪はれて書中の文字の其の義を知るに由なく、偶ま書中の文字より他の聯想を誘致せんか心之れが爲めに走せて讀書の人にあらざるに至らむ、かくては書を讀むとて何の甲斐なければ先づ外界の事情をして讀書に對する注意を奪はしめざる状態にあらしめざるべからず。そは言ふまでもなく靜閑なる場所にして一室人なく四隣も亦寂たるの時、徐ろに淨几に對して書を繙く、此の時此の際又何物の吾を累するなく、心書に専らなるを得るのである、されば古人も讀書三餘の說を立て、夜は晝の餘、雨は晴の餘、冬は年の餘として皆な讀書の好時節として居る、夜間は晝間に比して四顧寂寥たれば注意力の散亂を防ぐに於て最も便、雨の日は晴天に比して空氣もしめやかに外界の誘惑も少ければ讀書に適

外界の刺戟

讀書の季節

身體の感

し、冬は心神の困憊を來すこと夏よりも少なければ之れ亦讀書に好都合なり、(此の説は單に注意力の散亂を防ぐとしては恰當なれど、若し心身の状態よりいへば夜間を以て讀書の好時節とするには多少の異論あり、そは晝間精神を使用するが故に夜に至りては疲勞を告げて又緻密なる思索に適せず、一日の中に於て最も恰當の時を擧ぐれば寧ろ夜ならずして早朝心氣快爽の時ありかくして如何に外界の刺戟を避けたりとも、身體の状態不適當なれば以て其の散亂を防ぐことは出來ない、身體の諸機關をして其の對象を受くるに適當なる状態にあらしむるは注意惹起の要件にして見んとすれば目を睜り聞かんとすれば耳を傾く、今書を讀むに當りても身體を正しくして目を書に注がずんば注意は他に奪はるゝを免れない。朱子が學者、書を讀むときは須く身を斂め、正坐し緩く視、微しく吟じ心を虛うして涵泳し己に切して省察せんことを要すべしといひしは此の覺悟を示したのである。心身一如、心は身に影響し、身は心に影響す、されば身を斂めて正坐するとも心妄念の爲めに妨げられて書中の

決心

讀書の方法

四六

文字と一致する能はずんば之れも亦眞に書を読むことは出来ない、朱子更に其の心得を示していふ、

書を讀むには須く心を將て書冊の上に貼在し、句を逐ひ字を逐て各々着落あらしむべし。大凡文學者須く此の心を收拾して專靜純一ならしめよ。日用動靜の間、都て馳走散亂することなかるべし。方に始て文學を看得ると精密ならん、此の如くにして方にこれ本領あらんと、心を書冊の上に貼在して内より注意力を惹起するは最も必要なことにして、之れなくんば到底書と吾とを結合せしむることは出来ない、されば若し心に妄念の起つた時は

反省

一 何故に予は本書を讀みつゝあるか。
二 本書は何を教へつゝあるか。
を考慮して注意の散逸を防ぎ内は思念の群起を止めて諸種の心象中、讀書の意識を以て最も強烈ならしめ、外は身體を正して其の意識を助けば終に讀書に専心なるを得るも決して難いことでない。

二 専心の工夫

注意の特色

注意は實に書を理解するの第一條件で之れが種子となつて終に理解の花を開くのである。心理學者テイチエナー注意の價値を示して、

注意せられたる觀念は注意せられざる他の觀念に比して(一)意識中に一層明白なり、他の觀念は漠然たれど此の觀念のみは分明に現はれ、(二)此の觀念は他の觀念より一層長く續けられ、他の觀念は全く消失する後に於ても此の觀念のみは保留せらる、(三)此の觀念は他の觀念より一層價値あり、そは他の觀念よりも記憶せられ易くして他日之れを再現して使用するに適す、

受動注意

と説く、此の如く注意は書を理解するに於て缺くべからざるものであるが、外界の誘惑を防ぎ内心の紛亂を制して注意を書中に向はしめんとするは容易なことでない。併し之れは其の初めに於てのみで工夫功を積めば決して困難なことではない。心理學者の説によると注意には二種の區別があつて一を受動注意といひ、他を發動注意といふ、受動注意といふのは外から起つた刺激

發動注意

讀書と注意

四七

に對して心を其方に向けるので書籍の題目を見て讀まうといふ氣の起る如きを指し、發動注意とは心中に讀まんと欲する思念を起して之れに注意するので、これに多少の努力を要す、即ち外界の誘惑の來つて此の注意を他に轉せしめんとするを防ぎ、内部の觀念の起つて此の注意を紊さんとするに打勝ちて心を其の書に向はしむるにて散亂心の制止を第一とするは已にいふ如く、更に其の方法として、

音讀

一 音讀 此亦注意力の散亂を防ぐの一法にして眼のみにて讀まず、眼にて讀むと共に其の見たる所の文字を發音するの習慣にして其の爲めに口耳目の三は悉く一書の上の文字に集注せられて散亂せんとする心を防ぐ、朱子が口中に讀めば則ち心中閑にして義理自ら出づ某が始めて學ぶ時も亦是の如くなるのみ、更に別法なしといへるもこれに過ぎない。

反覆

二 反覆 朱子又いふ書を觀ば心を靜着し意思を寬着して沈潜反覆すべし、久うして自ら曉得せん」と、難解の所に至りて倦怠を生じ心他に散亂す

興味

るものなれば此の散亂せんとする心を書中に止め、止め止めて怠るなく書中の文字を反覆熟視する中には自然に其の意義を理解するを得て、これに興味を感じ終に注意力を集むることが出来る。

三 興味 興味は注意の一要件にして乾燥無味なる書には注意力を集むること難けれど、娛樂の書には自然心を専らにすることを得るも此の理なれば、如何なる書と雖も、これによりて興味を誘發せしめば注意力の散亂を防ぐことが出来る。

第二受動注意

斯の如く努力して書籍と自己とを平行せしめず、二者をして結合せしめ、心神は書中の文字に入り、書中の文字は我が心神に入り、自己をして全く書中のものとならしむるに至れば、曾ては自己を書籍に結合せんとて努力したりしも、今は書籍の爲めに引き付けられて我が心は全く其の爲めに占領せられ我は書籍と同化して外界の誘惑も乘するの隙なく内部の妄念は其の影を藏くして終に書の爲めに萬事を忘るゝに至る。心理學者はこれを第二受動注意の状態といふ、彼の莊子にある書を讀んで羊を亡ひし臧の如きは此の第二受動

状態に入つたので、例は少しく趣を異にすれど彼の心理學者カーペンターが激烈なる神経痛に苦みつゝも講壇に立ちて思想を吐露するに當り其の初めは多少苦痛を忍ぶの努力を要したるも説て佳境に入るに従ひては講義以外何物の意に介するなく講了て復た苦痛を感じ如何にして今まで之れを感せざりしやを疑ふほとなりしといひしも全く講義中は此の第二受動注意の状態に入りて我と講義と一となりて苦痛を忘れたのである。

讀書三昧

書を讀んで此に至る。我は直に古聖先賢と面接し、大學者大識見家と手を握り、天下の至理妙諦と一致し、古今の治亂興敗を一眸の中に集め、人情の迂餘曲折を現に味ひつゝあるので、其の快實に言ふべからず。これ吾等が讀書を以て天下の至樂とし之れに依りて慰められ之れによりて獎まさらるゝ所以である。若し夫れ暫く心を書より離して靜坐冥想其理を考へ其の道を判するに當りては書中の意義瞭々として明かなるを得るのである。毛程黄は讀書四要の説を立て、此の工夫を示して曰く、

一に曰く收、心を將て收めて身子裏にあり身を將て收めて書房裡にあるこ

れなり。

二に曰く簡、惟だ簡斯れ熟、若し治むる所のもの多ければ用力分れて奏功なく、精神疲れて歲月耗す。

三に曰く專、心を一處に置けば事として辨せざるることなし、其の心を二三にすれば必らず成就することなし。

四に曰く恒、專心致志一なりと雖も苟も恒なく時に作し時に臨み、初ありて終り鮮し亦成るなきなり、故に恒を存する最も要なり。

と、工夫怠るなくんば以て讀書の真味を會得するに至らむ、尙ほこれらの工夫に就ては次章讀書と記憶并に思索の題下に於て説明するを以て便なりとする。

書籍は心靈の慰安者なり、精神の醫藥なり

テオドラフス



第四章 読書と記憶

一 記憶の心理

記憶作用

卷に對して書を読むの時は注意全く書中の文字に奪はれて其の記事は明々瞭々として我が心象に映するが、一たび卷を掩ふの時には書中の記事稍々明瞭を缺いて次第に腦裏を消え行き、時を経るに従ひ、曾て讀みたりしことは茫漠として僅に心象の一部として意識の奥底に潜むに過ぎない。其の奥底に潜めるものも他日前の書又は類似の書を緝くに當りては忽然として現はれ來り、其の當時のことまでも想ひ起し、確かに曾て此の書を読みたり此の事を思考したりと認むるに至る、これを記憶作用といふ。即ち記憶には三個の過程があつて

記憶の三過程

- 一 把住 (Retention) 自己の経験したりしことを把住して腦に其の變化を止るをいふ。
- 二 復現 (Reproduction) 既に把住したりし経験を再び現出せしむるをいふ。

三 再認 (Recognition) 其の復現したりしことを確然と認むるをいふ。

唯だ把住した觀念を想ひ出したのみでは眞正の意味の記憶ではない、これを自己の経験界中のものと認むるに至つて初めて正當に記憶と稱するものであるといふのが心理學者の通説である。

さて吾等は如何にして自己の経験したりしことを把住するかといふに其れは先きにいふた注意で、自己の注意の向はざる事象は如何なる大きな事でも、終に心象に上ることなくして消失するものなれば先きにいふた専心の工夫こそ眞に記憶を助くるの一要素といふべきものである。即ち自己の心を書中の事象に傾注せしめ之れを意識の焦點に集むる時は容易に失念するものではない。併し此の自己の心をして書中の事象に傾注せしめ以て意識の焦點に集むるは唯だ機械的に書籍に對し反覆讀過したりとも満足なる効果の得らるべきものにあらずして充分の思慮を重ね考察を運らして其の書中の事象を明瞭に理解せなければならぬ。理解なき記憶は全然機械的となつて勞のみ多くして功は少ない、彼の讀書子が常に機械的記憶を要するが故に苦む地名の如きも

理解と記憶

注意と記憶

のを、多少の理解を加へて三河は三大河のある所、美濃は三野にて三大平原ありと知り、印度以西の大地方にアフガニスタン、ベルチスタン、トルキスタン等スタンの語尾を有する所多きはスタンは梵語の陸及び國の義であると知る等の方法を以てすれば忘るゝことがない。勿論其の事象を理解せずとも把住せんとするの努力を以て諳記諳誦又は筆寫等を爲したるものも亦記憶を助くるの力がないではない。即ち屢同文を反覆して書を離れて諳誦するに至り、又は數回筆寫して書を離れても其の文字を寫し得べきに至るまでの努力を以て感覺印象を深からしむるので、鶴林玉露に

筆寫法

唐の張參、手づから九經を寫す、毎に言ふ書を讀むは書を寫すに如かず、高宗は親から震翰を瀝ぎて逼く九經を寫せり、又嘗て漢の光武紀を御書して執政徐俯に賜て曰く卿、朕に光武紀を讀むを勸む、朕、思ふに讀むこと十遍之れを寫すこと一遍なるに如かず

とあるは筆寫法の功を説いたのであるが、潜心筆寫の際、靜かに書中の理を了解し得べしとするは一種の方法でもあり、又記憶助長にも力あるが未だ以

諳記法

て完全なる讀書法と目することは出来ない。諳記諳誦も亦完全なる讀書法にあらずして記憶に於ても其の功少なく、一時は能く記し得るが如きも、もともと理解せざるの事象なれば時過ぐるに従ひ心裡の印象全く消えて唯だ徒らに心力を勞したるに過ぎざるに至らん。澤柳氏の讀書法には之れを咎めて器械的の諳記は其益とする所最も少きのみならず、亦記憶すると最も困難なるものとす、喩へば原文の儘を諳記するが如きは恰も食物を丸呑みにして少しも咀嚼の作用を加へざるに同じ、丸呑みにせる食物は適腸胃を損傷するに足るも以て身體の營養をなすものにあらず、器械的の諳記は適智力の發達を害するに足るも以て有益なる知識を増進するものにあらずと、されば書を記憶せんと欲するものは充分に書中の事象理義を了解して其の要點を把住するを努むべきで決して全般を器械的に記憶せんとすべきでない、全般を其の儘に記憶せんとすれば却て要點を逸するので、ハーバートンは之れを以て合財鑿に雜品を投入するにも似たりと嘲り、記憶の要件を示して

記憶の選

記憶にも亦選擇を要す、其の有用と感ずるものを記憶に止むると共に無用

と感ずるものを排斥して自己の記憶域内に入らしめざる、これ記憶法中忘るべからざるの要件なり。

と、記憶の選擇には理解と思考とを要す、理解なく思考なき記憶は徒らに心力を勞するのみで決して永く心裡に把住せらるゝものでない。

充分に理解したるものゝ深く心裡に遺るは既に述べたる所なるが、更に又最も記憶に便なるものを擧ぐれば興味を惹きたる事象にて同一書中にても理義の了解し難き所、事象の興味なき所は記憶に存せざるも興味ある例話は永く心理に印象するは日常の経験によりて明かなることにて、殊に滑稽なる事奇警なる事等の心に印する深さも全く此の心理作用によるのである。「時代を知らざるものは笑ふべし」と云へる一句は記憶に便ならねど

或者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、或る人、四條中納言えらばれたるものを道風かゝんこと時代や違ひ侍らん、覺束なくこそといひければ、さ候へばこそ世に有りがたき物には侍りけれとていよく秘藏しけり（徒然草）

興味と記憶

の一話は印象深く、蜀山人の

世の中に人の來るはどうるさきはなし

とは云ふものゝおまへではなし

の歌の記憶し易きは其の奇警なるにあり、其他、「燕雀何ぞ鵠鴻の志を知らん」「千羊の皮は一狐の腋に若かず」寧ろ雞口となるも牛後となる勿れ等の語の記憶せらるゝは此の爲めである、これら滑稽奇警なるものゝ外、韻律を備へたるものゝ記憶し易きも亦興味あるが故にして、詩歌俳句の永く心に印する如き其一例なり、されば古來記憶の一法として句調よく配列すること行はれ。俚諺地震の歌に

句調と記憶

九は病ひ五七は雨に四つひでり

六つ八つなれば何時も大風

といひ、又古人が手爾遠波を記憶せんとて、

ぞるこそれ思ひきやとはなりぬらん

これぞ五つのでにはなりける

といへる如きも此の韻律を利用して記憶に供したので、彼の鐵道唱歌によりて停車場の名を記憶し、流麗にして句調よき文句。例へば太平記の落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦きて歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも旅寝となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば行衛もしらす思ひおき、年久しくも住み慣れし九重の帝都をば、今を限りとかへりみて、思はぬ旅に出でたまふ、心の中ぞ哀れなる、憂きをばとめぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば潮ならぬ海に、こがれ行く、身を憂き舟の、浮き沈み、駒もとゝろと踏みならず、瀬田の長橋うち渡り、行きかふ人に近江路や……

等の文句の讀者の心に印する如きも此の爲めである。併し吾等の書を讀んで記憶すべき條目は唯だ興味ある箇所のみではない、興味なきことをも記憶せねばならぬ必要があるのであるから其の場合は反覆精讀して強き注意と不斷の努力とを以てせなければならぬ。一體吾等の記憶といふものは、其の事象に

記憶の法

接した當時は保持せらるゝものなれど時の經過は會て記憶したりし事をも漸次意識の下層に潜めて朦朧として霞を隔て、山を見る如くになり、終には全く忘失したるものなれば、書を讀んで記憶せんとするには讀過、卷を捨て、顧みざる如き所業を學ばず、時々取り出して再三之れを緝く、必要がある。

記憶に關する心理上の大則は略ば上述の如くであるが、更に略説すれば、
一 新しき刺戟は記憶鮮明にして再認せられ易きも時間の經過するに従ひ漸次朦朧となる。

二 記憶するに當りて用ゐたる努力の多きものは記憶すること深けれど、少きものは忘失し易し。

三 其の事象に注意すること深きものは記憶せられ易けれど注意淺きものは直に忘失せらる。

四 從て興味ある事象は記憶せられ易く興味なき事象は記憶せられ難し。尙ほ此の外に一つの忘るべからざる法則がある、これを觀念聯合(又聯想律)といふ。次ぎの記憶の方法に就て之れを説かん。

二 記憶の方法

人の心といふものは麻糸の亂れたるが如くさまざまの思想感情の紛然雜然として入り込むで居るものゝやうであるが、其の實觀念聯合の作用によりて秩序整然として保たれて居る。花といへば直に吉野を想ひ、吉野といへば直に南朝を想ひ、南朝といへば直に醍醐天皇を想ひ、後醍醐天皇といへば直に楠正成を想ひ、楠正成といへば直に湊川を想ふ如きは此の觀念聯合の作用にして之れを接近聯想といふ。これにも數種あり、駿河といひて富士山を想ひ起すは所の接近にして、織田信長といひて戰國時代を想ひ起すは時の接近、明智光秀を想ひ起すのは人の接近である。此の接近聯想の外に類似聯想なるものあり、こは落花を見て雪を想ひ、紅葉を見て錦を想ふ等、一の觀念起ると共に會て經驗せし他の觀念にして之れに類似せるものを想ひ起さしむる心的状態にして、これにも亦數種ありて先きに擧げし落花を見て雪を思ふ如きは其の形狀色彩の相類似せるよりの想起にして、溪流を聽て雨を想ふ如きは

觀念聯合
と記憶

音調の類似である。此の他反對の聯想とて美を見れば醜を想ひ、黒を見ては白を想ふ等の聯合があつて皆な一團となつて我が心に收るが故に一つを出して他を想起することが出来る。世間の記憶法は多く根底を之れに有するので、顔淵、閔子騫の名を覺ゆるに、殘念發四間として記憶し、亞米利加のオハヨ州を覺ゆるにお早うの語を以てする等は音調の類似により、泉岳寺を覺えんとて赤穂義士を記憶し、龍田を覺えんとて紅葉を記憶する如きは所の接近によつたので、更に此の根底を巧に應用して記憶の便に供することが出来る。左に二三の例を擧げん。

符號的記
憶

一 符號的記憶 四國は阿波讃岐伊豫土佐なり、此の名を記憶せんが爲めに其の頭字のみを取りてアサイト即ち麻糸として覺える如き東京の劇場に於て定りたる食品なる菓子辨當壽司をカベスとして記憶するの類にして其の頭字を以て全體を想起せしむる人工的記憶法なり。

二 假構的記憶 毫も聯絡なき數箇の事象を聯絡あるものとして記憶するにて、山梨縣の物産は甲斐絹、葡萄、水晶なることを記憶せんとする

假構的記
憶

假托的記憶

に、甲斐絹に葡萄を彫つた水晶が包むであると覺ゆる等にして又一種の記憶法なり。

三

假托的記憶 此は全く心内に假托する方法にて常に心内に一室の如きものを想像し記憶せんとする事象を之れに結合せしむるにて先きの山梨縣の名産ならば先づ戸棚に甲斐絹あり、床の間に葡萄あり、机の上に水晶ありといふやうに假托するにて數十の事象をも順序よく此の假托によりて記憶することを得べし。或は自分の身體に結合せしめて頭に甲斐絹の頭巾を被り口に葡萄を食ひ、手に水晶を持つとして記憶するも亦一法なり。

換數的記憶

四

換數的記憶 此は數字記憶の方法として屢ば用ゐらるゝものにて四千五百廿三圓といふを覺ゆるに四はヨ五はイニはフ三はミなるを以て「よいふみ」として記憶し四千六百九十といふを「讀む事」として覺ゆる如き或は一を市、二を荷、三を産、四を死、五を基、六を祿、七を質、八を蜂、九を苦、十を重等の同音の語に換へ本年は西曆一千九百十年なるを覺

人工的記憶の可否

えんとせば市で苦んで重い病人即ち行路病者と記憶する等の方法なり是等人工的の記憶法は一種の技術としては面白けれど讀書上に於ては却て他の聯想を惹起し且つ其の記憶も亦多く一時的のものなれば吾等は此の如き方法を探らず、寧ろ徐ろに自然の心的作用に任せ注意と努力との方法によりて記憶を計るの順道たることを勸むるのである。併し聯想は心内の一事實なるを以て讀書の際其の事象と關係ある他概念と聯合せしむるは一面に記憶を助くると共に他面に於ては思考を補ふに功大なるものである。思考のことは後に説くから此には略するが、書中の要目に注意を惹起すべき符號を付し、若くは其の要目を抄記して、それを根底として他の枝末の義理を聯想するの便に供するは最も必要なる記憶法である。今、古來讀書家の使用せる主要なる方法を示さんか。

一

圈點 此は和漢文の書に於て使用せらるゝものにて書中の記憶を要すべき箇所を朱を以て○●等の符號を付し置くにて他日二たび其の書を緝くの際には直に其の圈點に目を觸れ以て其の他を聯想せしむるもの

にて唐彪の「凡そ書文圈點あれば則ち讀者領會し易し」といへるもの此の法である。

引線

二 引線。こは主として洋書に於て使用せらるゝにて同じ書中の要目に色鉛筆を以て線を引き置き以て記憶の一助とすること。和漢書に於ける圈點に同じ。

貼紙

三 貼紙。必要なる箇所紙を貼して記憶に供するにて古來疑難の點に紅唐紙を貼付したるが如く要目點に單に紙を貼し又はそれに注意すべき條目を記入し置くにて参考索引等の便に供するを云ふ。

記入

四 記入。こは書中の餘白に自己の感想又は記憶に供すべきことを記入し置きて他日緜讀の際の補助たらしむるもの。

備忘録

以上は直に其の書籍に加筆し貼紙するものなるが、備忘録やうのものを造り、其の要目を抄記し、たとひ二び其の書に接せずとも、備忘録を緜くに於ては記憶すべき事項に於て缺くるなからしむるの法あり、蓋し備忘録は讀書家の好伴侶にして諸書の要點をこれに抄記し他日の用に供するは其の利頗る

抄記法

多し、されど其の使用の法を誤る時は折角の抄記も勞して功なきに了るべきものなれば必らず一應其の書を読み了り、さて其の後に要目を抄記するの法を取り、初めより紙筆を携へて書に對し、唯だ抄記することに心を奪はれて其の書の要領をも没却し断片的の抄記をのみ殘して、而かも全體に對しての眼目を逸する如きは初學者の往々に陥る抄記の弊たり、リチャードソンの「讀書の選擇には備忘録の濫用を以て讀書に伴ふの重荷たるに了るべし」と誠め、且つ其の作法を示していふ。

備忘録は讀書したる後に伴ふべきものなることを忘るゝなかれ。卒然讀むに従ひ未だ充分に理會せず直に之れを抄記する時は徒らに一知半解の事をのみ記入して何の益なきものたるに過ぎざるに至らん。

といへり、聞くエマーソン一代の名文は多く彼れが備忘録中より湧出し來ると、若し夫々周到なる注意を以て書中の要目を抄記し、精密なる目次若くは索引を付して常に座右の料とせば其の記憶を資するに於て功頗る大なるは云ふを要せない。これを一冊の書とせず、カードの如きものに記入し他日整理

の便に供するも讀書家中に行はるゝ有功の方法にしてこれ亦一種の備忘録作製法である尙ほ此の備忘録記入の方法に就ては單に抄記するのみならず、更に有用なる撮要、分解等の法あれど、そは思索に關すること多ければ後章に於て説述することゝし此には唯だ抄記のみを云ふに止めておく。

三 記憶力の養成

身心の相關は動かすべからざる大法にして吾等の記憶も亦其の身體と密接なる關係を有し體力弱き時は腦力も亦弱く身體健かならざる時は精神も亦健かなる能はざるものなれば記憶力養成の第一歩は腦力の養成にして腦力養成の第一歩は身體の衛生にあることは今更ら喋々の辯を要せず。されば記憶力を増進せんとするには平素衛生に注意し身體を清潔にして新鮮の空氣を呼吸し且つ滋養物を攝取し適度の運動を以て身體各部の發育を計らざるべからず。殊に記憶に密接關係を有する腦髓は全身の四十分の一に過ぎざる重量を有しつゝ其の勞動に費す所の血液は全量の八分の一を超過するものにて常に新鮮

腦力身體
と記憶

腦力と記
憶

なる血液を求て止まざれば良好なる記憶を保たんには新鮮なる空氣を呼吸して其の供給に充つることに注意し、其の使用も亦適度を失はざるやうに心掛ければならぬ、若し其の使用を過度ならしむるときは精神混沌として記憶力を減退せしむるの恐れあり、されば身體及び腦髓の疲勞したる時に努めて讀書し努めて記憶せんとするは偶ま以て之れを害するものたるに過ぎない、今左に腦力増進に關する主要の心得を示さん、

一 食時の前後に強て記憶を計るべからず、

食時の前は空腹を感じて腦も亦其の養分の缺乏を來して其の力薄く食時に當りては多量の血液消化作用に集注するが故に腦の血液少量となりて記憶の印象も亦薄弱なるを免れず、これを強て記憶せんとする時は腸胃に向ふべき血液を腦に集注するが故に腸胃を害して却て腦力の發達を妨ぐるに至る

二 就寢前に強て記憶を計るべからず、

就寢前に強て記憶を計らんとする時は精神興奮して終に安眠する能はざるに至るものにて、安眠なければ腦の休養なく爲めに其の力を減退せしむるに至

る。

三 腦力使用の時間に制限を付せざるべからず、

朝より夜に至り、夜より朝に至り書に對して毫も休むことなくば腦力其の爲めに疲れて記憶も亦薄弱となるを免れざれば時間を限りて勉學の後に休養、休養の後に勉學と交替し又は同一讀書にても初めに腦力を要する専門の書を讀めば後に腦力を休むる娛樂の書を読み、更に又専門書を繙く等、一定の時間にて書籍若くは事業を轉換するも亦記憶の増進を助くる方法である。

四 飲酒喫煙に於て節制する所なかるべからず、

過度の飲酒は神経系統に異状を呈し腦の作用を緩漫ならしめ、過度の喫煙は腦の一般官能を弱くし倦怠の念を生せしむるものなることは何人も知る如くなれば記憶力の増進を計らんとするものは此の兩者を全廢するか、よし遊に全廢し難きは節制を守りて過度に失することなきを要す。

以上は主として身體上の注意なるが、心身兩面に亘りては井上圓丁氏は殊に讀書家の爲めに左の要點を示されたり、

讀書家に
關する注
意

一 場所を選むを要す、

二 時間を選むを要す、

三 室内周囲の狀態に注意するを要す、

四 時間の前後の事情に注意するを要す、

五 毎日一定の習慣を形成するを要す、

六 順序を正しくし錯雜を避くるを要す、

七 一事に熟達して他に及ぼすを要す、

八 必要有益の書を選みて之れを研修するを要す、

と、各項の説明は略ぼ前章并に本章に於て叙述したる事項に盡きたれば此には贅せざれど場所は清閑にして時間に身心の爽快なる時、室内周囲の狀態は注意力を害するものなきを貴び、徒らに時間を繼續して倦怠を生ずるに至らざるを努め、毎日課程を定めて一定の習慣と成さしめ、順序を定めて思想の錯雜を避け、易より難に淺より深に歩々向上進歩の方針を取る等は記憶力増進に於て缺くべからざるの注意である。是等身心の注意の外に尙ほ一つの最

淨坐と記
憶

も必要なるものがある。それは外でもない、先きに専心の工夫を説く時にも言及した静坐である。讀書作文譜に朱子の語を引て

昔、陳烈先生記性なきを苦み、一日孟子を讀み、學問の道、他なし、其の放心を求むるのみといへるに至り、忽ち語て曰く我が心、曾て收得せず、如何か書を記得せんと、遂に門を閉ぢて静坐し、讀書せざること百余日、以て放心を收め、後、去て書を讀む、遂に一覽して遺すなし。

と云へるは静坐の記憶の増進に功あるを示したもので、こは常に記憶力増進に於て功あるのみならず、思考力養成に於ては缺くべからざるの工夫である、同書に

程叔子、面前の水盆を指し、語て曰く清静中、一物を著すべからず、纔に物に著すれば便ち動搖す、學者未だ解悟せざる所あるを見れば静坐中に向て之れを求めよ

とあり、又静坐の法を示して

吳因之曰く、凡そ静坐せんと欲す、先づ心を息むべし、日常事に隨て練習

し、遊情雑念盡く抛捨し、潔々淨々、常に此の寂然不動の體に還らんを要す、纔に昏惰を覺えば則ち奮迅振發し、纔に懶散を覺えば即ち專一凝神なれ、大慧これより生ず、

とある皆な此の工夫である。思索は記憶を助け記憶は思索を助くる此の兩方面に於て吾等の常に怠るべからざるは静坐である、人の記憶力は年によりて強弱あり、思考の力も亦齡によりて差がある、リンドキルは記憶の強烈なるものを十二三歳とし、年と共に漸次減じて三十以上に至ると殆んど強烈なりし時の三分の一となる、併し思考の力は之れと反比例を爲して年と共に進み五十二三歳に於て其の頂點に達するといふて居る。記憶を以て思考を補ひ、思考を以て記憶を補ふて初めて讀書の功を充實することが出来るので、其の之れを爲すに於て吾等は現時の人々に閑却せられたる静坐を勧誘するのである。更に思索の條下に於て再説する機會があらう。

第五章 讀書と思索

一 思索の必要

ジエームス、ポールドウインの愛書論はコルリツヂの言を引用して讀書家を分類し、「一種の人は水母の囊の如くに清潔にして良好なるものを逸して唯だ穢れたる廢物のみを自己の中に留め、又一種の人、人は海綿の如く一たび吸收したる後に之れを吐き出して顧みず、又他の種類の人、人は漏刻に等しく如何に讀書するとも悉く漏出して何等の痕跡をも腦裡に止めず」といひ、更に一種の人を擧げて「鑛山に勞働する坑夫の如く黄金寶石のみを採掘して砂礫土塊の數を排除す」といふて居る。吾等は此の鑛山に於ける坑夫の如くに金と寶石とを得て砂礫と土塊とを排除するの工夫を以てかゝらねばならぬ。金や寶石は決して容易に得らるべきものではない。多大の勞力を以て之れを得ることに努めねばならぬ。若し此の勞力を吝むの時は折角寶の山に入つても手を空うして歸るが如く何等の得る所はない、同じ譬喩はラスキンの「王の寶

坑夫と讀書家

忠實と眞面目

庫といふ講演の中にも述べられてある、彼れは此の譬喩を用ゐ來つて、「諸君の求むる所の黄金は著者の意見、著者の思想に外ならずして書中に用ゐられたる言語は即ち礦石である、黄金を得るには此の礦石を碎破せねばならぬ。諸君の鋤は諸君自らの注意や才力并に努力に外ならず、諸君の鎔爐は諸君自らの思索工夫である」と説いて居る、されば書を讀むに當りては精看熟讀、其の書の意義を正當に理解することに勉めて一字を疎にし一句を忽にして爲めに其の中に含まれたる貴重物を逸するの恐を避けねばならぬ、即ち讀書家開卷第一の注意は其の書に對して忠實なれ眞面目なれといふ數語に歸するのである、併し著者と讀者との懸隔が甚しき時は如何に忠實に眞面目に讀みたりとも尙ほ其の眞意義の解し難きことがないではない。其の時には再三再四之れを熟讀して、さて左看右看して思索を運らし考慮を重ね其の眞意義を會得せずんば止まざるの覺悟を要する、若し一讀解し難しとして之れを放擲し去る時は終生其の寶石を得ることなく徒らに勞して功なきに了るものである、ラスキンは之れを説て「彼れは決して慈善的に與ふるものにあらずして唯だ

疑と悟

勞力の報酬としてのみ之れを與ふ」と即ち與へられざるは其の勞の未だ足らぬのである。吳因之いふ、書義之れを思ふて即ち得る者あり、之れを思ふ竟日にして後、得る者あり、明日に又之れを思ふて後、得る者あり、力量未だ到らず、累日之れを思ふて而して通すべからず、停擱すること三月五月の後を俟つて識見精進、或は重て之れを思ひ、或は他書融發して恍然として得るものあり。凡そ理疑はずんば悟を生せず。惟だ疑て而して後悟るなり、小疑なれば則ち小悟し、大疑なれば悟ち大悟す、故に學者悟の難きに非らず、疑の難きなり。其の疑ふ者と悟る者とは何物ぞや、是れ心竅中の生機なり、夫れ心中、原より機竅あり、但た疑ふて思索するにあらずんば則ち機觸れずして理開かず、焉んぞ能く了悟せん、故に學者書を見る宜しく聖人の語氣を追尋すべし、聖人何の爲めに此の一句を説き、何の爲めに此の一字眼を下す、聖人字を下す化工の物を肖るが如し、決して鑿々移らざるの道理あり、一章を看ば須く關鍵何の處にあるかを討ぬべし。一句を看ば須く上文如何、下文

力讀書と勞

如何通章の血脉如何と討ぬべし。と、これ實に礦を碎いて金を得る法である、若し其の勞を厭ひ何の思索する所なく、難解の文に遇つては倦怠を生じて中廢したらんには金は終に得る機なきに了るのである、例の唐彪も亦之れを戒めて初め看る時竟に茫然一も知る所なきが如きも、畏難の心を生すべからず、時を逾へて再び看ば或は十中、其の一二を曉らん。怠倦の心を生すべからざるなり。時を逾へて再び看ば或は十中其の五六を解せん、更に已むべきの心を萌すべからず、時を逾へて復た看ば工夫既に到りて解を期せずして自ら明かならん、大學に所謂力を用ふる久うして一旦豁然として貫通するもの豈に虚語ならんや、人安んぞ一閱まだ領會する能はずとして即ち之れを置くべけんや。と反覆、思索を運らすことを怠らずして初めて讀書の目的は達するのである。されば讀書と思索とは離るべからざるの要件にして思索なきの讀書は水母の如く海綿の如く又漏刻に似て何の功なき徒勞に過ぎない。吉益東洞は古

醫方の泰斗なり、曾て二三子に示していふ。

二三子に告ぐ、學ぶことあるも思はざれば得ず、思ふことあるも學ばざれば得ず、吾之れを學ぶものを見れども未だ能く之れを思ふ者を見ず、管子曰く、之れを思ひ之れを思ひ、又重ねて之れを思へ、之れを思ふて通せずんば鬼神將に之れを通せんとすと鬼神の力にあらざるなり。精氣の極まるなり、小子之れを思へ。

自家の力量と讀書

と、思索の讀書に必要なは上來之れを述るが如しと雖も、初めより自家の力量不相應の書に對するは決して策の得たるものではない、力量不相應の書でも思索を重ねること多時終に觸發する所あるは吳因之の説いた如くであるが、事には順序あり、讀書に於ても亦其の順序を立て、易より難に就く時は易を棄て、直に難に就くに比して勞半ばにして功却て多きものがある。これは前に專修書選擇の條にも説いた如く良師若くは先輩に就きて淺より深に入るの法を立つるが最も必要である、例の朱子に讀書は箭を射るものに例し、五斗の力あるもの四斗の弓を用ふる時は之れを拽て満たしむることを得て他

水を習ふが如し

に勝ぐるが如く、讀書家も亦自家の力量をして餘りあらしめねばならぬ、若し自家の力量を度らざる時は決して他に勝ることを得ないといふて居る。併し常に自家の力量をして餘りあらしめて充分に力量を試ることなき時は易に慣れて難に就き難く其の學をして長進せしむることは出來ない、莊田琳庵の修學法に

學は當に水を習ふが如くすべし、之れを淺所に習ひ、而して後、深きに向ふ、没溺して死せんと欲するもの數次、方に始めて功を見る、若し其の溺るゝを懼れて淺處を離れ得て了せざれば終身水にありと雖も、亦數尺の水を游泳すること能はず

と、考量思索、没溺して死せんと欲するもの數次にして方に始めて功を見るのである、就れの點よりいふも思索は讀書に眼睛を點するので之れなき讀書は得力殊に少いのである。

二 研究と思索

讀書に四種類あることは既に書籍の選擇の條下に説述したる如しと雖も、今、思索を説くに當ては之れを二種に約することが出来る、即ち一は研究の爲めの讀書、他は修養の爲めの讀書である、娛樂の爲めの讀書は勢ひ深く思索を運らすの要なきものを選ぶの傾向あれば此に略する、否な若し是等の書にて思索を要することあれば、そは研究若くは修養に資せんとするに過ぎないのであるから此の二種の中に含まるゝと見て差支はないと思ふ。

さて學術の研究といふことは古は讀書のみの如くに解せられて書を読むのが即ち學問、多く書を読みたるが即ち學者であつたが、近世學術の進歩は讀書のみを以て研究の全般とすることを許さず、更に觀察と實驗との二方面を要する、觀察といふのは事物を精到に見究むること、實驗といふのは之れを驗査して果して其の理法の如くなるべきものか否かを知る、此の二は即學術研究の双眼鏡で此の二によりて其の言ふ所の空理空論にあらずして實事たり實現たることを證するのである、一切の科學の研究は此の二の上に立つので此の二を缺いては決して研究の名を冠することは出来ないのである、併

觀察と實驗と讀書

觀察實驗の必要

し如何に實驗と觀察とが必要であるとするも、前人實驗の事蹟は書籍に於て傳へらるゝのであるから全然讀書を廢して事物の研究に従事することは出来ないから此の二の双眼鏡も讀書によりて初めて功を奏するのである。即ち書中の説く所を事實に徴して若くは書中に説く所を根底として更に推理討究して之れを書中未だ説かざる所に應用して其の眞偽を判断して行くのが研究であるから實驗と觀察とを事とする科學の研究に於ても讀書と思索とは廢することが出来ない。否な之れを廢しては實驗と觀察とも支障を生ずるのである。殊に實驗以外觀察以外に突入して宇宙の根本原理を究めんとする哲學并に宗教の如きに至ては讀書と思索とが其の研究の基礎をなす者であるといふも誣言でない、其他文藝に關する諸學科の如きは讀書は實に其の中心である中心ではあるがこれのみを以て研究とするは大なる誤で既に古人も格物究理といひて讀書以外に於ける實驗の必要を説き、長齋閑話には

唯だ書物の上にては知る所真切ならず、半上落下の事多し、虎の話を聽て恐ろしく思ふと、虎に遇ふて傷を受けて恐ろしく思ふとは大に違ふなり、

眞に虎に遇ひしを眞知といふべし、何事も實地を踐まずして書籍のみにて窮理するといふは疊の上の兵法、島の中の水練なり、予山水を好む、近國の勝景を探らんとする時、先づ十人の遊記地志を讀み、彼の山の形はかくあらん、此の水の流はかくあらん、土地風俗はかくあらんと思ひ、其處に至り見れば悉く相違するなり、是にも知る百聞は一見に如かず、格物もかくの如くなるべし。

ロツクの讀書法

とあり、讀書と實驗とは共に棄て難し、朱子いふ、學はこれ書を讀むにあらす、然れども書を讀まずんば學を爲す所以の道を知らずと、實驗や觀察のことは本書の主眼でないから暫く之れを措き、單に讀書のみの研究法を説かつか、其の劈頭の語は既にいふた忠實なれ眞面目なれの二語に盡きて居るので、澤柳氏の讀書法にはロツクの讀書の心得を略説して、

- 一 著者の言語に拘泥せずして其の思想を失はざらんことを努むること
- 二 其の題目論説に適當要用なる思想と無關係不必要なる思想とを明に區別すること

三 論説の條理主旨の何れにあるやを明にし枝葉岐路に陥らず、眞意を失はざらんことを努むること

四 論説の關係輕重を了知すること

五 論説の根據の何れにあるかを明にすること
 と。かくして讀む所の書中の意義を明にしたらば其の要を摘むで備忘録に記入するも亦一法である。卷を掩ふて此の書の意義は如何なりしやを考量し其の要を摘みて抄記し以て思索の用とするので之れを綜合法又は撮要法といふ。即ち一篇の大主眼を捕捉して

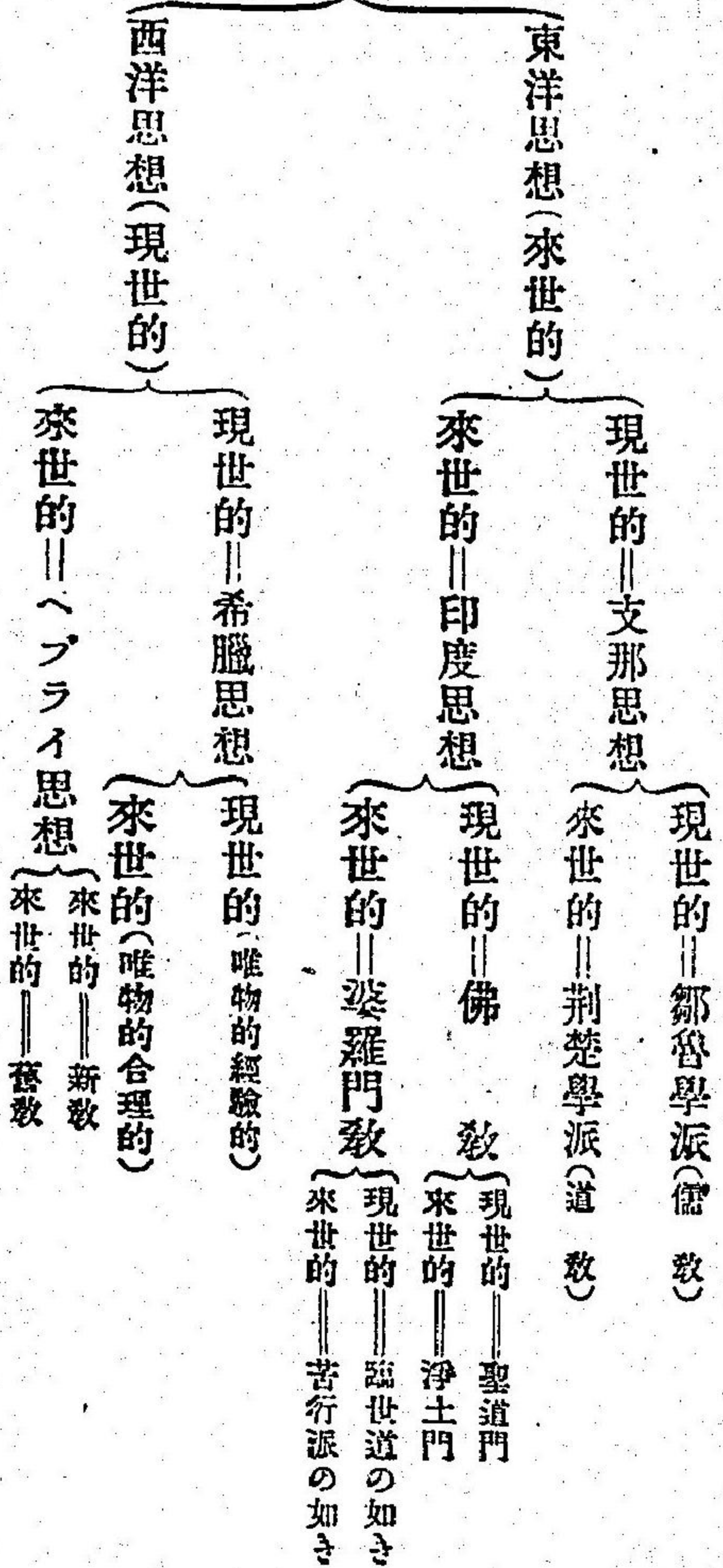
撮要法

- 主中の主 此れ篇の大主眼
- 主中の賓 大主眼の客たるもの
- 賓中の主 客たるもの、中殊に主要なるもの
- 賓中の賓 客たるもの、中主要ならしむるもの

等に區別して撮要し、又は書中の意義を分解して之れを圖表として記憶に便するも亦思索を助くること多し、拙著大死生觀に東西兩洋の思想を大觀して、

分解法

大死生觀



としたるは正確にかく云ひ得べきにあらねど大體の傾向より分類したので、これらを分解法といふ、此の如くに撮要し分解して、さて其の書の云ふ所が自己の曾て知る所若くは考へし所と比較して果して一致したりや否や、自己は其の書の説を正しとし得べきや否やを考へ、こゝに研究の端緒は開くので、研究の第一歩は疑ひにある、書を読んで疑を起すといふことは餘程熱心に

研究的讀書

思索せねば出來ないことで大抵は讀過して何の疑ひなきに了るのだが疑ひなきものには研究がない、研究のないものには悟るの期はない、大疑の下に大悟あり小疑の下に小悟ありといふたのもこれで、一書に疑を生じ、更に同一題目に就て説述したる他の書籍を取り來りて之と比較考量してこれを解決せんとす、これを研究的讀書といふ、古人も書を読んで疑なきものは先づ疑あるに至らしむべし、疑あるものは疑なきに至らしむべしといふた程で、已に疑あり多くの書を繕きて以て自説を定むる。此の場合に於ては、吾等は多讀の必要を勧むる、多く讀めば讀むほど其研究の題目に對する智識を廣くするので僅に一二の書のみにて速斷する時は正鵠を失することがないとは云はれぬ。勿論此の場合には何れの書も初より終りまで通讀するには及ばぬ、其の題目に關する個所のみを飛び讀をしても差支はないので、要は其の研究事項に關する智識を豊富にして自己の斷定をして誤なからしむるにある、古來の學者が派を樹て黨を分ち自己の信する學説にあらずんば之れを子弟に讀ましめず強て自家の説に同せしめんとしたのは研究の範圍を狭くしたもので博學審問

の道ではない、一題目の下に研究せんとするものは多く讀んで以て其の判断を明確にするのが最も必要で、安積良齋の

學は一家を墨守するに及ばず、道の存するは皆な學と思ふべし、程朱の諸賢は勿論なり、陸象山王陽明諸公の言も其の善なるは皆な從ふべし、漢唐諸儒の説も取るべし、老莊申韓佛氏の言も善なるは皆な取るべし、愚夫愚婦の言も亦取るべし、かくの如く胸襟豁大、古今を包括する勢ひにて志の高大とも云ふべし、朱舜水云ふ學問の道は裘を治むるが如し、其の粹を選んで而して之れを取る、若し吾れは某氏の學、吾は某氏の學と云はば則ち所謂博學審問の道にあらざるなりと、此の語通會の論といふべし

といへるは晩近の所謂自由討究を鼓吹したので學者の則るべき法である。

會讀

これは獨力研究の上で云ふたのだが、若し同好の士相會して同一題目に就て研鑽し又は同一の書を會讀せば其の思索を資すること決して尠少でない、俗にいふ三人寄れば文珠の智恵で、各人其の境遇閱歷を異にし、個々見る所も同じからざるのであるから獨り閑窓に研究を盡くして解し難きことも數人

下問請益

相會すれば容易に解することが出来る。孔子が禮を老子に問ひ、官を剡子に問ひ、大廟に入ては事毎に問はれたのも、顔回が能を以て不能に問ひ、多を以て寡に問ふたのも皆な這般の消息あるが爲めで、例の唐彪は之れを喩へて「燈を一廳の上に燃す、燈一二盞なれば則ち能く一二席を照らすに止りて三四席を照らす能はざるも、數十餘燈を一廳の上に燃す時は一廳照らざる所がない、凡そ一人の聰明才智は一二盞の燈の如し安んぞ能く天下の事理を照さん問を好むで十人の聰明才智を我に併せば譬ば十盞の燈を燃すが如く、更に問を好んで數十人の聰明才智を我に併せば猶ほ數十盞の燈を燃すが如く自然に天下の事理をして明かならざるならしむる如きものであるといひ如何せん、黒魚の甚しきもの腹中一の有る所なくして而して自ら謂へらく才と學と已に能く人に過ぐと謂々然とし、自負して下問を屑とせず噫誠に惜むべきなり」と喝破した。書は友の如し、吾等は之れによりて益を請けるのであるが、友は又書の如し之れによりて益を請けることを忘れては其の進歩も亦遅々たるを免れぬ。殊に無師獨學せんとするの人々は此の請益下問を忘れては萬事獨

白石の逸話

斷に流れて判斷の正鵠を失ふことがないとは云はれぬ。研究會、讀書會等を設けて其利便に供するも亦讀書家の取るべき良策にして、彼の新井白石が人と應接談話する毎に必らず草紙を側に置き事理の心得となること又は山水風土物産の類古今人物の事などを割記し置きて博聞強記の碩儒となれる如きも亦參考に資すべき逸話である。

三 修養と讀書

忠實なれ眞面目なれの語は一切の讀書に對する好個の訓誡にして殊に修養を目的として古聖の書を読むに當りて一層切實なるを覺ゆ。聖賢の書は簡にして約、しかも文字以外に深遠の義理あり、唯だ文字に拘泥して文字以外の大文字を看取することがなかつたならば、折角聖賢の書を読むとも毫も修養に資することは出来ないのである。安積良齊は巧みなる譬喩を以て一畫人云ふ、山水を寫すに筆墨にて形容せる所は人も見て巧拙を辨ずれども、墨を着けざる白紙の空地なる所に妙趣あるは誰も見て賞するものなし、讀書者は玩

文字以外の文字

味に言外の意を自得せざれば妙所に達せずと、此の言外の意を自得するのは即ち思索の力で、思索なき讀書は唯だ文字を見るのみで其の以外の眞義は到底解することが出来ない、これ殊に修養に關する讀書に於て思索の必要を云ふ所以である。

然らば如何に思索すべきかといふに、修養の要は探て以て自家頭上の物とするにある、されば古人も書を読んで自家頭上に應用し來るにあらずんば萬卷を讀破するとも書厨書庫と異ならずと喝破したほどで、朱子は

自家身上に理會せよ

學問は自家身上に就て切に理會するを要す、那の讀書底は已にこれ第二義、自家身上に道理都て具はる、外面の添來を假らず、聖人自己の經歷し過ぎし者を得て之れを書に著し、人の未だ經歷せざるに先づ之れを知つて之れを身に體せしめんと欲するなり

といひ、陸象山は六經我を註脚すと説いて居る、これを眼に讀まずして心に讀み、心に讀まずして身に讀むのが聖經に對する心得で、彼の日蓮上人の如きは常に我は法華經を身に讀むものなりと主張せられた、身に讀んで初めて

體證

古人と比

其の義理の更に痛切なるを感ずるので、若し古人の傳を讀み語に接して之れを我が身上に持ち來る時は彼の衛の莊姜が「我思古人、實獲吾心」といひ、李延平が「只だ古人遭ふ所の患難大に堪ゆべからざるものあるを思ふて持し以て自ら比せば以て少しく安んずべし」といふ、程伊川が小人の爲めに排擯せられて濟州に謫せられ、後、赦に遇ふて郷に歸りしに氣貌容色少しも平昔に異らざりければ門人之れを怪みて先生何を以て此れを得たると問ふに答へて學の力なり、大凡學者患難貧賤に處するを學ぶ、富貴榮達の如きは即ち學ぶを須たざるなりといふたのも皆な身讀したるの功である、或る人が古人の傳記を讀むに當り之れを自分の年齢に比して見ると趣味一段の深さを覺ゆといふたのも此の思索法で閱歷を比し年齢を比して之れを自己に求むる時は、何人も感奮の情を起さざるものはない。孔子は三十にして立つ、我れ已に三十、而して未だ立つ能はざるを慨し、アレキサンドロスは壯年にして天下を席卷す、我れ齡之れに過ぎて碌々何の爲すなし、吉田松陰は未だ三十ならずして遊ぎ、偉名赫々たり、我齡之れと相近く、世路も亦彼れの如く險惡ならずして、し

ゲーテの名言

かも些の功なし等と思索するは修養を資すること實に大なるものあり、併し這般の思索に就て吾等の陥り易きは其の書に心醉するの結果、之を正當に判斷するを忘れ、書に魅せられて却て自家の本領を失却し、平地に波を起すの志望を抱くことである。悉く書を信すれば書なきに如かず、如何なる目的の讀書に於ても單に之れに心醉して正當の判斷を缺くほど危険なるはない、彼れには彼れの事情境遇あり、我れには我れの事情境遇あり、須く自家頭上に於て思索せよといふのはこれで、一意に心醉せよといふのではない。心醉するのには思索は要らぬ、思索といふことは判斷を含むで居るので、判斷して而して後、其の學ぶべきを學び、去るべきを去る。ゲーテ曾て讀書家を分類して

或る人は單に讀書して何等判斷力に訴ふることなくして鑑賞し、他の人は鑑賞せずして判斷に努め、更に他の人は鑑賞しつつ判斷し、判斷しつつ鑑賞す

と、吾等が讀書は常に鑑賞しつつ判斷し、判斷しつつ鑑賞せねばならぬ。唯

中村の讀書箴

だ鑑賞的に聖賢の書を読んで少しも判斷的思索を運らざるは書に酔ふもので眞に書を讀むものではなく、書に魅せらるゝもので書を領會するものではない。判斷に流れて鑑賞を缺くより、徒らに自我の觀念のみ強くして書中の意義をも採り入れて自家の修養を資する能はざるが如く、鑑賞にのみ走りて判斷を怠るものは其の本領を失墜して自家の得力たらしむることが出来なくなる。中村忠昌の「讀書箴」は能く這般の理を道破してある、繁を厭はず其の全文を擧ぐ、

- 一。人は心正しく眼明かにして物にまどはされざるを要すべし。心は物に引かれて移るものなり。されば天地不易を心となして書籍異端に欺かれざるを要す。
- 一。書籍は能く人心を移し易ゆるものなり、讀書の士一心主なき時に、心隨ひて心の移り行くこと魔魅に會ふが如し、終に心をとらるゝに至る。
- 一。書籍は飲食の如くすべし。食ふて能く其の味を詳にし、一に國體にか

なふものを選ふべし、これ學問の一大要素なり、竊に怪む世の讀書者却て書籍に讀まれて魂心爲めに變易せられ、終身之れが奴となる、歎すべきの甚だしきなり。

- 一。凡そ讀書は本國の爲にするの志なき時は皆いたづら事なり、書籍を食ふて詳に味ひ、正偏得失を明にして異國の書に魂をとらるまじきことなり。

- 一。學問は天地を師として國の中を執る、最上なり、天地を師とするは今日の事物に就て正理を推すといふ。凡そ森羅萬象、萬事萬端、盡く天地の發見にあらざるはなし。されば萬事萬端、天地の正理にしたがはざれば、一日も行れず、天地の正理に隨ひて事を治め、天地の正理に隨ひて物を安んず、之れを天地を師とすといひ、天地を書籍とすといふ。

と、中村忠昌は文政天保度の讀書士、其の言古臭を帯びたりと雖も、言ふ所は自主的觀念の鼓吹にして漫然たる讀書家の頂門の指針である。

正當なる判斷を以て之れを自家頭上に將ち來るは此種の目的に對する讀書
 思索の一大要件であるが、これを爲るには先づ書中の意義若くは事實を正當
 に理解し、さて其の意義を自己の思想と比較し、其の事實を自己の境遇と比
 較し、其の千古に傳誦せらるる所以を考へ、其の今尙は新たなるの理に推し、
 思索數番こゝに正當なる判斷を以て、取るべきは取り、捨つべきは捨つて、
 以て自家の用に供するので、此の種の讀書に於て思索の殊に最も必要なるを
 感ず。

思索の必要は此の如くであるが、事、多く自家に關するが故に、超然たる
 研究的態度と異り、諸種の事情油然として心に浮び、思ひはあらぬ方に走せ
 て書中の意義を離るゝこと遠きに至ることが少なくない、古人は此の點に關
 して多大の注意を拂つて居るので室鳩巢は其の「自警條目」の中に
 雜念は善惡を問はず、最も讀書の間に害あり、戰々兢々、豫め之れを防ぐ
 べし、
 讀書の時、志意を凝定し、急速にすべからず、又心目を明張し、蹉過すべか

案に對するの間情念將に生せんときは、正念を呼び起し、痛く之
 れを懲らすべし、暫時も忽にすべからず
 と警め、吾等が上來しばしば靜坐の讀書に缺くべからざるをいふたのも皆な
 此の思想の散亂を防がん爲めである、心の糸は亂れ易く、觀念の聯合は甲よ
 り乙、乙より丙と葛藤紛然たるに至るものあれば此の妄念を制して復び書中
 の文字に落し來るには其の工夫靜坐に過ぎたるはない、閉目靜坐して其の心
 氣を養ひ、再び思索に従事する時には心清うして義理も亦明かなるに至るの
 である。例の唐彪は靜坐と摘記との關係を示して、
 或は靜坐の時、或は夜氣清明の際、偶爾として思惟し、忽然として心察開
 通し精思妙理、層々として生ず、一二日を過ぐれば心察復た閉ぢ、茲に得
 る所の者、又復た記憶せず、故に其の心察開く時に就て即ち登記すべし。
 遅るべからざるなり
 といふて居る。書を讀んで快心の所に到り、靜坐冥想して感じ來りしことを

抄記して他日思索の料に供するは最も必要で、一時は感興大に至るも之れを抄記し置かざる時は復び求め難く、曾て思索したりしことをも全然忘失することあるは讀書家の常に實驗する所、即ち讀書家は備忘録の外に感想録やうのものを製して其の感想を摘記し置くの必要がある。これは單に修養の爲めの讀書のみならず研究の爲めの讀書にも必要であるが、殊に修養の資料とするには利益もあり興味もあることである。

予は余の書齋に於て聖賢と相會す、然れども一步書齋を出れば忽ち世の惡人と會せざるを得ず

ウイリヤム、ウオルラー

雄藩本欲育書生

歐涉雲山千里程

要談乾坤活歷史

須暗世態與人情

會澤正志

第貳篇 讀書と自修

第壹章 讀書と作文

一 作文と思索

書を読むは他人の思想を自己に傳へるので之を思索して自家頭上に將ち來るは咀嚼して自家の思想とするのである。されば藤田東湖も咀嚼の二字は讀書の要訣、書を読むで咀嚼玩味する能はず、忽ちに看過せば日に十百卷を誦するも大抵耳食の徒たるを免れずといひ、又た「古人の眼光紙背に透るといふは、是れ眞に能く書を読むものも若し徒に古人の糟粕を嘗めて活眼を開て彼の肯綮の處を見る能はず、陳言陳迹を誦習して見る所、紙面の文字に過ぎざるもの之を能く書を読むと謂ふべからず」と罵つたのも皆書を読んで自家の思想と爲す能はざるを戒めたので、前章に於て云ふ如く讀書は思索によりて初めて功あるものにして思索なくんば則ち日に十百卷を誦すとも畢竟耳食の徒たるを免れぬ。彼の判斷しつゝ鑑賞し、鑑賞しつゝ判斷する讀書は其の

眼光紙背に透る

肯綮の處を看むとする沈重なる思索にして、我は書によつて啓發せられ、書は我によりて啓發せらる、此の間に我が想は練れ、我が見は進む、練れ練れ進み進みて我が思想も我が見識も之れを讀書以前に比して優ること數等なるものあるに至る、これ實に自己の思想内容を豊富にしたので自家を大ならしむる所以である。

書を讀む須く此の如くなるを要すべきは上來しばし説く所。此に云はんとする作文の目的は全く之れに反し自己の思想を他に傳へんとするにある、即ち讀書は思想を得る所以の道で作文は思想發現の法である。思想の發現は作文のみに止らず演説あり談話あり身振もあるが、此の中に於て最も密接なるは作文である、身振や談話は書を讀まずとも出來、演説も亦讀書家ならぬ人に於ても出來ないことはないが、作文に至つては讀書を廢しては斷じて爲すことは出來ない思想發現の法である。勿論談話演説の料としても讀書は缺くべからざる要件で、書中に資を得ることなくして價值ある談話價值ある演説の爲し能はざるは云ふまでもなけれど價值なき作文も書を讀まずんば決し

思想の發
現と思想
の得

て爲し能ふものでない。書籍は文字を介して思想を他に傳ふるもので、作文も亦文字を介して思想を他に傳へんとするのである、更に語を切にして云へば自己の思想を他に傳へんとする作文も他の人の之れを讀むに當ては即ち讀書であり、自己の讀む所の書は他人の作文の結果である。

文を作らんとして用うる所の文字はこれ自家獨得のものにあらずして古人が書籍に用ゐたるものである、若し古人未だ用ゐざる新發明の文字を以て自家の思想を他に傳へんとせんか、そは全然失敗に終るべきは三尺の童子も尙ほ之れを知る、よし其の文字は古人使用のものたりとも其の联接を擅にして新熟字を出さんか、これ亦自己の思想を完全に他に傳ふる所以にあらず、蓋し文法といひ語法といふは古人の作文書籍に使用したるもの、中より人皆なの一一致して最上良習なりと認諾したるに基くもので、修辭といひ美辭といふは古人の用ゐたる文の形態によりて如何にせば適當に且つ有効に自己の思想を他に傳達するを得るかを攻究するもので書籍を離れては終に文を作ることを得ない。此點に於て書籍は實に文章の源泉であるといふも差支ない。併し作

文法語法

文の源泉

文は決して他の書籍の模倣でもなく轉寫でもない一たび之れを自己の思索の爐竈に陶冶して其の發現の機關たる文字こそ古人の製作にかゝるものを使用すれ其の中に含まれたる思想は當然自家獨得のものでなければならぬ。若し何等自家獨得のものなく徒に古人の糟粕を嘗むるものならば之れ未だ眞に文を作るものではない、文の源は須く讀書の中に求むべきも、その充分に思索せられ自家のものとなつて迸發する所にある。武叔卿いふ。

石玉を韞んで而して山輝き、水珠を懷て而して明媚なり。文字俗賤なるは皆蘊藉深からざるに因る、蘊藉深からざるは皆な涵養未だ到らざるに因る、涵養の文、氣味自然に深厚にして丰采自然に朗潤、理餘趣あり、神餘間あり、詞盡きて意窮らず音絶て韻已ます、所謂淵然の光、蒼然の色なるものこれなり、

と、作文に思索を要するは猶ほ讀書に思索を要するが如し、袁坤儀、教へていふ。

作文三昧

作文三昧あり、先づ須く胸中の鄙穢を掃除して一塵を染めざらしめ、静坐

三四月、或は半年、縦ひ能はざるも亦事に随ひ情を遣り念中に於て念を息め、妄心妄見を將て一分を減得せば便ち一分の受用あり、之れを習ふ久うすれば自然に塵氣漸く退き、淡泊虚融、然して後、再び經史大家の文を取て次第に之れを讀み口誦心維、優游涵泳して其れをして漸積汪洋せしめ是に由りて筆を握りて文を爲す、隨機應副、自然に一家言を爲す。

と、静坐して思索を運らし心を平にして而して書を読み以て源泉を得るが此の教で、書を読むで思索して、思索して書を読む、先きに讀む所は自家の想を養はんが爲めに、して後に讀む所は自家の思想發現の機を得んとするにある、實際文を屬せんとして思慮混亂して筆動かざるの時、氣を轉じて古人の文を讀むと此に落筆の動機を得ることは少なくないので、書かんとする準備としては其の題目に關する諸種の書を読み、いざ落筆といふ時に文の巧みなるものを一讀し用筆に於て多大の教訓を受くるは吾等が常に實驗する方法である

二 作文としての讀書

作文に關する讀書には自ら二つの異なる目的がある、一は作文の資料を得んとするの讀書で、他は落筆の法に就ての讀書である、即ち前者は研究の爲め思索の爲めの讀書で、後者は作文の爲めの讀書である、研究の爲め思索の爲めの讀書は自家の思想を成す所以で、作文の爲めの讀書は思想表現の方法の爲めの讀書である。讀書の眞目的は前者にあつて後者でない、併し思想は栗の實の如く内に熟すれば外に發せざるを得ない。既に外に發して自己の思想を他人に傳達するとすれば如何にして正當に且つ的確に傳ふことを得るかを攻究するは止むを得ざるの必要で、此の必要の爲めに後者の讀書は頗る有益有趣のこととなる、前者の讀書に就ては已に之れを述べ來つたのであるから此には後者即ち作文としての讀書に就て其の要件を語ることにする。

文の基礎は文字にあり作文の爲めの讀書は多く文字を知るに初る、多く文字を知つて初めて自己の言はんとする思想を最も明瞭に現はすべき文字を使用することを得るので、文字の知識少きものは恰當の字を選ぶの餘地なく文字の爲めに想を誤ることがないではない。同じ花を形容するにも爛熳を恰

好とするものもあれば窈窕を適當とするものもあり、或は芳艷、或は清奇、或は麗彩、或は嬌紅等花により景によりて字を異にするし、同じく英雄を形容するにも剛毅、豪膽、英邁、俊秀、敢爲等の字もあり、雲を呼ぶ蛟龍とも淵に潜める龍ともいろ／＼な熟字がある、此の字を知るといふことが文を作るの第一準備である、されば古來の作家は夙に此の事に注意しチャザム侯ビットは二回までもベレーの英辭書を通讀したと云はれ、我が國の文章家と云はるゝ人も字書辭典の類を座右に供し、或は文章軌範或は八大家文讀本等を諳記して詞藻の豊富を計り、文勢の趣向する所を會得した例は澤山ある、彼の森田節齋は史記の項羽本紀を諳誦し、頼山陽は人の問に答て

要は博覽にあり、喜ぶべきものを抄出して、一本と爲し、之れを座右に置き其の會心のものを誦取し諳誦すれば則ち妙なり。是の如くすること久しければ文思自然に湧出す、元明清諸家の説及び隨筆の如き臥して之を讀み其の才思を助くるも亦可なり

といふ

讀書の直接に作文に資するあるは文字の智識を廣くして詞藻を豊饒ならしむると共に、誦讀の法を用ひば、文勢おのづから口に慣れて、文勢の暢達を助くる決して少からぬのである。併し初學者が多くの文を悉く誦讀することは出来べきことでもなく、又益あることでもないから、頼山陽の如く會心の文を抄出して之れを座右に置き、興に乗じて誦讀し、以て其の文勢と語法とを會得するのが最も便法である。室鳩巢も亦人の問に答へて

ひかし孫華老、歐陽公と相識ること久し、或る時、間に乘じて文字をもて問ひしに、歐公の曰く、作文には他の術なし、唯だ書を讀むこと多ければ、則ち之を爲ること自ら工なり、世人の患は讀書に懶くして、又文字を作る少きにあり。一篇の出る毎に即ち過を人に求む、此の如きは至るあるもの少し、疵病必ずしも人の指摘を待たず、自作自ら能く之を見るにあり、と、翁おもへらく、歐陽公の言、平實にして味あり、文章を學ぶにこれより近きはなかるべし。翁數年文章に心を用ひて、何とぞ捷徑もあらんかと、いろく尋ね求めしが、後に文を學ぶに別に悟入の法なし、唯だ讀書にあり、歐陽公の

言、我を欺かざるを知りぬ、歐陽公、古今文章の大家として其の言かくのごとく、其上、古人の爲に云へるに心底をのこさるることあるべからず、然るに其の言是に過ぎざれば、此の外に餘法なきこと明らかし、又韓退之、李翱に答ふる書、柳子厚、韋中立に答ふる書、并に蘇老泉が歐陽内翰に上る書を見て知り給ふべし。三子はいづれも初めより著作を事とせずして、積年の力を讀書に用ひしかば、讀書に勞して、著作に逸せしこと、はからざるに符節を合せたるが如し、されば韓柳歐蘇が文章におけるは、天授の才といへども、それさへ讀書より得ざるはなし。今吾黨の學は、文辭を専門にせねば必ずしも文章家を學ばんとにはあらねど、常に用ふるに辭達して事のかげぬ程にもならば、それも古文辭をよむにつとむべし、今の後生多くは、躁進にして、久しく思を讀書に潜むるに耐へず、常に志を著作に鋭うして、たゞ自ら文を作りて、師友の指摘を求むることのみよしと思へり。知らずや、指摘の益は大體文字程に中りて、中に一二所の疵病を改め、又は彼これより善しとするをいふなり、今率易にして體をなさざる文字もて是正を求むるは、

たとへば室屋の如し、結構次第を失ひ材木等倫を失ひ、或は堂を後にし室を前にし、或は棟を椽とし、椽を棟とせば一向に住居をなさずといふべし。大匠といふとも、いかゞ修補すべき、たゞ穹を窪ぎ傾を支ふるまでにしてやみなまし。今、後生の文字を指摘するも、亦此の如し。爾に於て何の益あらん。この故に翁かねて後生にいへらく、先づ筆を下さず、其の作の功を讀書に用ひて古文辭に思を深くせよ。久しうして必ず古人の口氣になれ、古人の作意を得て、我が心に悦懌する所あるべし、然らば時々擧揚するも工夫の一なりと、先儒もいへば著作を一向に廢せよとはあらず、但し十に七八の力を讀書に用ひ、二三の力を著作に用ふべし。かくして月を經、年を經ば韓柳歐蘇がやうになくとも、相應に悟入する所ありて文字を作るに手熟し、筆活きて、用ふるに隨ひて足りぬべし。これ晩くして早く、遠くして近き道なり。

と、作文に従事せんとするもの、肝に銘し、胸に刻すべき一大教訓である。讀書を離れては作文の資料其一半を減じ、讀書を離れては作文の方法學ぶに

七八の讀
書二三の
作文

アチソンの
話

道なし、作家一日讀書を廢すれば一日其の文を低くし一日讀書を勵めば一日其の文を高くす、古人の長所を知るも讀書にして自己の短所を省るも亦讀書なり。讀書と作文とは實に密接の關係を有して常に好んで讀む所の文は知らず識らず自己の作文に影響し、韓柳歐蘇其の好む所に從ふものは文にも自ら其の風あり、太平記を嗜むものに太平記の格あり、頼山陽に私淑するものには頼山陽の調あり、馬琴を愛するものには馬琴の口吻を免れず、常に和漢文に於てのみならず歐文に於ても愛誦する所のあるものは、時文を綴りても其の面影を存し、或る人はマコレー、或る人はカーライルに似たる所あるも亦此の讀書の力である、アチソン嘗ていふ、大作家の書を讀むや、毎に其の卓越せる句法より新らしき美を發見するか、然らざれば更に強き感銘を得て談話思索の仕方までもおのづから彼れに習ふに至ると、模倣は人の性なり、常に親むものに類似し來るは當然のことなれば作家は其の平生讀む所に於ても多大の注意を拂はねばならぬ。

然らば作家は如何なる書を讀むべきか、先づ第一に正當に國語を書くべき

代表的著
第一流の
作

法則を示したる文法語法の書の忽にすべからざるは言ふまでもなく、次ぎには及ぶべき限り最良なる方法を以て思想と感情とを表現することを主とする學及び術なりとヘブンの云へる修辭美辭の書を読むは之れ自ら文を屢するに於て資する所大なるのみならず、又他の文を読むに於ても缺くべからざるものである、以上は主として文を作るの法を説きたる書なるが、さて親みて古人の文を讀まんとするには人々好む所を異にするが故に此に定示することは出来ず、且つ範を漢文に得んとする人もあれば國文に得んとするもの又歐文に得んとするもの等あれば一概にいふ能はざるも、其の一時代を代表する最良の文章の書を選ぶべきは云ふまでもない、即ち國文に就て云へば平安時代の代表として源氏物語、枕草紙、鎌倉時代を代表する平家物語、源平盛衰記、足利時代を代表する太平記并に謡曲、徳川時代を代表するものとしては近松の戯曲西鶴の作品、さては馬琴の里見八犬傳、弓張月の如きをいふので、一言に約せばこゝにも第一流の書を読めといふ語を繰返すの外はない、ジョン、フオスタールは第一流の書を読むべきを懲惡して或る特別の理由あらは格別、最

時文の大
家

高等の書を読み得べき時に際し何の故にか劣等なるものを繕くべきといふて居る作文としての讀書は即ち我が文の師たらしむるのである、世間何の愚人か良師を棄て、凡流に學ぶべき、これ一般讀書家の心得べきことにて殊に此の讀書に於て其の切なるを覺ゆ。
今や我國は文章の過渡時代に屬して古文并に外國文に於ては師表とすべきものを選ぶに難からぬが時文に於ては各々其の好む所に從ていづれを第一流とすることは出来ないが、故人になられた福澤諭吉、福地櫻痴、陸實、尾崎紅葉、長谷川四迷の諸氏は第一流として差支はなく、現存の人々にても三宅雪嶺、徳富蘇峰、朝比奈碌堂、森鷗外、幸田露伴、坪内逍遙、夏目漱石諸氏の文は後世の師表とすべきもの多いと思ふ。時代には時代の色彩あつて唯だ古文のみを繕讀して満足せらるべきでないから參考の爲めに一言して置く。

第貳章 讀書と外國語

一 原作と翻譯

宇内は打して一丸たり列國は比隣の如し。單に自國の書を読み自國の先輩が思想を窺ふのみを以て當世に處し得べしとせば、それは未だ時代の進運に伴ふ能はざる固陋の見解たるを免れず。佛都巴里の流行は直に我が東京の流行となり、印度に於ける綿糸の相場は直に我が市場に影響する今日、英京倫敦に出版せられたる書籍は數月ならずして、我が思想界に反省を促し、南歐の作品は來つて我が文藝を風靡し、北米の新著は其の創見を我が新紙に傳ふ。此の時此の際僅に自國の先輩の著書のみを以て満足せんとするは自ら好んで時代の進運に逆行せんとするものである。されば現代に於ける讀書子は單に自國の先輩の書き遺し若くは現に書きつゝある書籍のみを讀むを以て足れりとせず、更に廣く世界文運の趨向する所を觀察し普く國外の名著を涉獵するの必要あり。さて此の國外の書を讀むに就ては二つの方法がある。一は國語

外國思想
の
二法

に翻譯せられたる書籍に依るか、他は進んで其の國語を研究し直に原作によつて之れを味ふかである。進んで原作を味ふは至難の業にして退いて翻譯書に由るは容易の業である、二者抑も孰れを選ぶべきか、翻譯書を是とするものはいふ、外國語の研究には多くの日子を要す、此の多くの日子を翻譯書の涉獵に費せば勞すること少くして得ることは頗る多い、今日の如く翻譯書の多き世の中に、自ら苦んで至難なる外國語の研究に腦力を費すの必要を認めないといふ。これ一應道理な立言であるが、翻譯といふものは的確に原著の意義を傳へ得るものであらうか、如何に嚴密な翻譯でも漸く其の書中の大要を傳ふるだけで其の語が特有せる聲調語氣に至りては終に之れを完くすることが出来ない。唯だ眞を傳ふるを目的とする科學並に哲學上の著述は之れによりても多くの不便を感ぜざるも美を目的とせる文藝上の著述に至ては翻譯は唯だ僅に其の形骸を傳ふるのみで生命と活力とは容易に傳へらるゝものではない。國語は國民の聲、其の聲によりて初めて其の思想を會得することが出来るので如何に巧みに翻譯せられても、それは畢竟生氣なき實物の模寫に過ぎ

科學上の
翻譯文藝
上の

ない。今ま最も吾等に近接せる和漢兩文の例にとるも、和文を漢譯しては其の意完からず、漢文を和譯しては語勢自ら趣を異にする、彼の高師直が鹽谷高貞の妻に贈れる

返すさへ手やふれけんと思ふにぞ

わが文ながら打もおかれず

を获生徂徠が漢譯して

我思美人贈之書、美人不見棄庭除、

吾拾吾書歸十襲、心謂美人手所觸、

となせる其の意は即ち得たり、其の調や終に傳ふる能はず。唐の郭振が子夜

春歌

陌頭楊柳枝、已被春風吹、妾心正斷腸、君懷何得知、

を岡多冲が

ちまたくの青柳さへも、あれ春風が吹くわいな、わたしの心のやるせな

や、思ふお方に知らせたや、

唐の李白の

白髮三千丈、綠愁似箇長、

を忍海和尚が戯に

わが黒髪もしら糸の、千ひろく、に又千ひろ、憂さやつらさのますかみ、

いづくよりかは置く霜の、

となせる類、巧ならざるにあらねど和漢自ら其の趣を異にし到底原作の意を

十分ならしむるものではない、況して全然意譯して程劍南の

長夏草堂寂、連宵聽雨眠、何時懸月色、松影落庭前、

を杏園主人の

五月雨やあるよひそかに松の月

とし、或る人の

越王勾踐破吳歸、義士歸家盡錦衣、

宮女如花滿春殿、只今惟有鷓鴣飛、

を

かまくらやさかえし人のあととへば

雨に友呼ぶ山鳩の聲

と翻し、韓退之の

雲横秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前、

を後水尾天皇の

行かれて家路いづこと白雪の

すまぬ駒の足柄の關

としまへる如き其の意を取りたる所はさることながら原作とは又別種の趣を存して翻譯なりと云はねば其の然るをさへ知り難し。同文同想の和漢兩文に於ても尙ほ此の如しであるから況して其の文字を異にし思想を同うせず人種宗教も全然異なる歐米の原作を翻譯し若くは我が思想を彼れに傳へんとするに於て其の完璧は殆んど期すことが出来ない。誰か

和漢文英
譯例

On every side the vaulted sky

I view : now will the moon have peered,

I throw, above Mikasa high

In Kasuga's for-off land upreared.

といへる英譯に依りて

天の原振りさけみれば春日なる

みかさの山に出でし月かも

といへる原作と同一の趣を味ひ得べきぞ。

大學之道在明明徳、在新民、在止於至善、知止而後有定、定而後能靜、

而後能安、安而後能慮、慮而後能得

といへる大學の文句もゼームス、レツグの

What the Great Learning teaches, is to illustrate illustrious Virtue ; to renovate the people ; and to rest in the highest excellence

The point where to rest being known, the object of pursuit is then determined ; and, that being determined, a calm unperturbableness may be attained. To the calmness there will succeed a tranquil repose. In that repose there may be careful deliberation, and that

deliberation will be followed by the attainment of the desired end.

といへる譯にては原作の簡古なる文と含蓄多き義とを見難く、老子道德經の道可道、非常道、名可名、非常名、無名天地之始、有名萬物之母、故常無欲以觀其妙、常有欲以觀其微、此兩者同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門といへるをホーバ、ケーラヌの

The Reason that can be reasoned is not the eternal Reason, The name that can be named is not the eternal name. The Unnameable becomes of the ten thousand things the mother. Therefore it is said :

“He who desireless is found

The spiritual of the world will sound.

But be who by desire is bound

Sees the mere shell of things around,”

These two things are the same in source but different in name. Their sameness is called a mystery. Indeed, it is the mystery of mysteries. Of all spirituality it is the door.

と譯したる如き霞を隔て、花を見るの感なき能はず、これらは譯其者の悪いのではなく、東西相隔たり而かも數千の年月を経たる古文を譯せんとするに就ては免れないことで、所詮精到に書を讀んとするものは原作に就て研究するより外はない、吾人も云ふた如く、外國語を學得するのは、新世界を發見すると同じく、自己の眼界を廣くし、讀書の範圍を擴張すること、が出来るのである、英語を解することによつて吾等は直接に世界の文豪たるシェクスピアの戯曲を味ひ、獨逸語を解することによつて他の媒介を経ずしてゲーテ、シルレルの作品に接することが出来、佛蘭西語を解することによつてヴィクトル・ユゴーの生ける言語に觸ることが出来る、若し夫れ希臘語によつてプラトーンを解し、ヘブリュー語によつて舊約の金言を會することを得ば其の快幾許ぞや。外國語の研究は現代の讀書家に取つて缺くべからざる一要件である。されば讀書家として有名なる英國の大政治家グラッドストーンは希臘羅馬、佛蘭西、伊太利、獨逸、西班牙等の諸國語に精通したるにも拘はらず晩年はイブセン等の諸作を其の國語にて讀まんとてスカンデナヴィヤの語を究

翻譯は臨
寫なり

めたりと傳ふ、翻譯は其の隻影を寫すことは出来るも到底全體を示すことは出来ない。其の國語によつて其の國の作品を見るは直に實物に就くもので、翻譯は其の臨寫たり模型たるに過ぎない、臨寫と模型とは吾等をして實物を憧憬せしむるの媒介とはなるが到底實物に接したる時の如き感興を起さしむることは出来ない。前きにもいふた如く説明的記述的な科學的の讀書は其の翻譯だに精到的確であれば其の眞義を傳ふることの出来ないではないが文藝的作品に於ては決して充分に其の目的を達し得べきものでない。

翻譯の必
要

併し斯く云ふたからとて吾等は全然翻譯無用論を説くものではない。實物に接する能はざるものは模型や臨寫で満足せねばならぬが如く外國語の智識のないものに外國の思想を鼓吹するのは翻譯の外はない。よし其の思想は一たび譯者の腦裏を通過して來たものであつても忠實なる翻譯でさへあれば原作者の思想はこれを窺ふことが出来るのである。殊に讀むべき書には限りなくして學習すべき外國語の數には限りがある、如何に腦力の優れた人でも世界の各國語に曉通するといふことは爲し能はざることなれば多少とも翻譯書

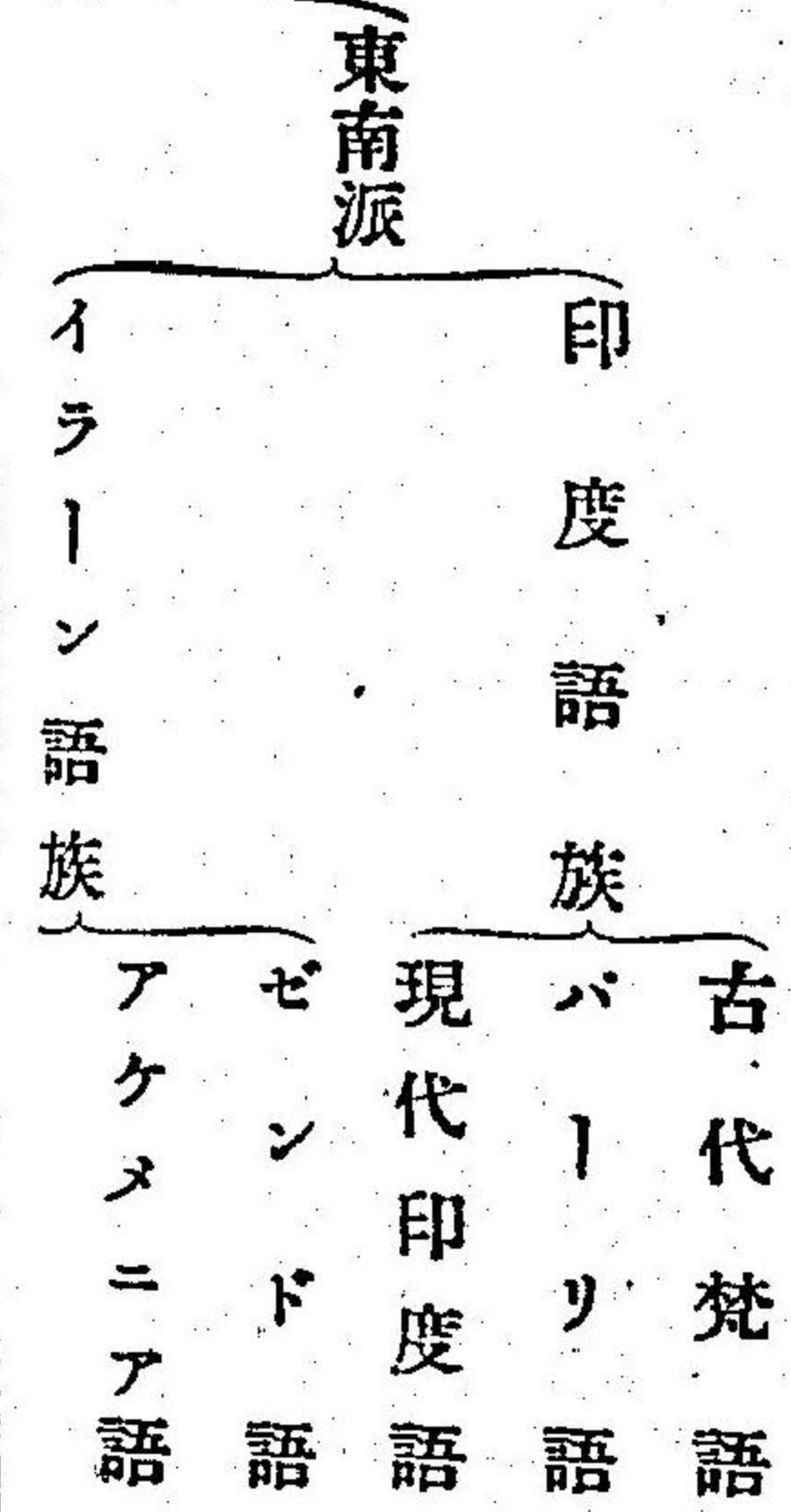
世界の言
語

の利便に依らざるを得ない。但し其の翻譯書は成る可く語脈の近いものを選ぶがよい、同じくプラトーンの書を讀むに際し其の原語たる希臘語を解せずして日本譯か英譯かによらねばならぬとせば日本譯よりも英譯を擇ぶを以て適當とする如きは其の一例である、世界は廣く書籍は多い、僅に一二の外國語に通じたからとて、それで翻譯書を廢することは出来ない。

抑も世界の言語は其の數頗る多く、小異を認めて之れを分てば千を以て算し萬を以て數ふるとも尙ほ充分なる能はざれど、異中に同を求むる學者の研究は世界の言語を三分して一を印度歐羅巴語族といひ、他をセミチック語族といひ、其餘をチュニアン語族といふ、印度歐羅巴語はアールヤ人種の言語にして世界人文に貢獻する所最も多く、古くは印度の梵語、希臘羅馬の古文字より近くは歐米諸國の言語を綜括し、セミチック語は其の名の如くセム民族の言語にしてフィニケヤ、カルデヤ、アッシリヤ、シリヤ、アラビヤ、ヘブリエーの諸語皆な此の中に含まれ現に歐米諸國に使用せるアルハベットは實に源を此の語族に發したので古代に於て盛行した言語である、チュニ

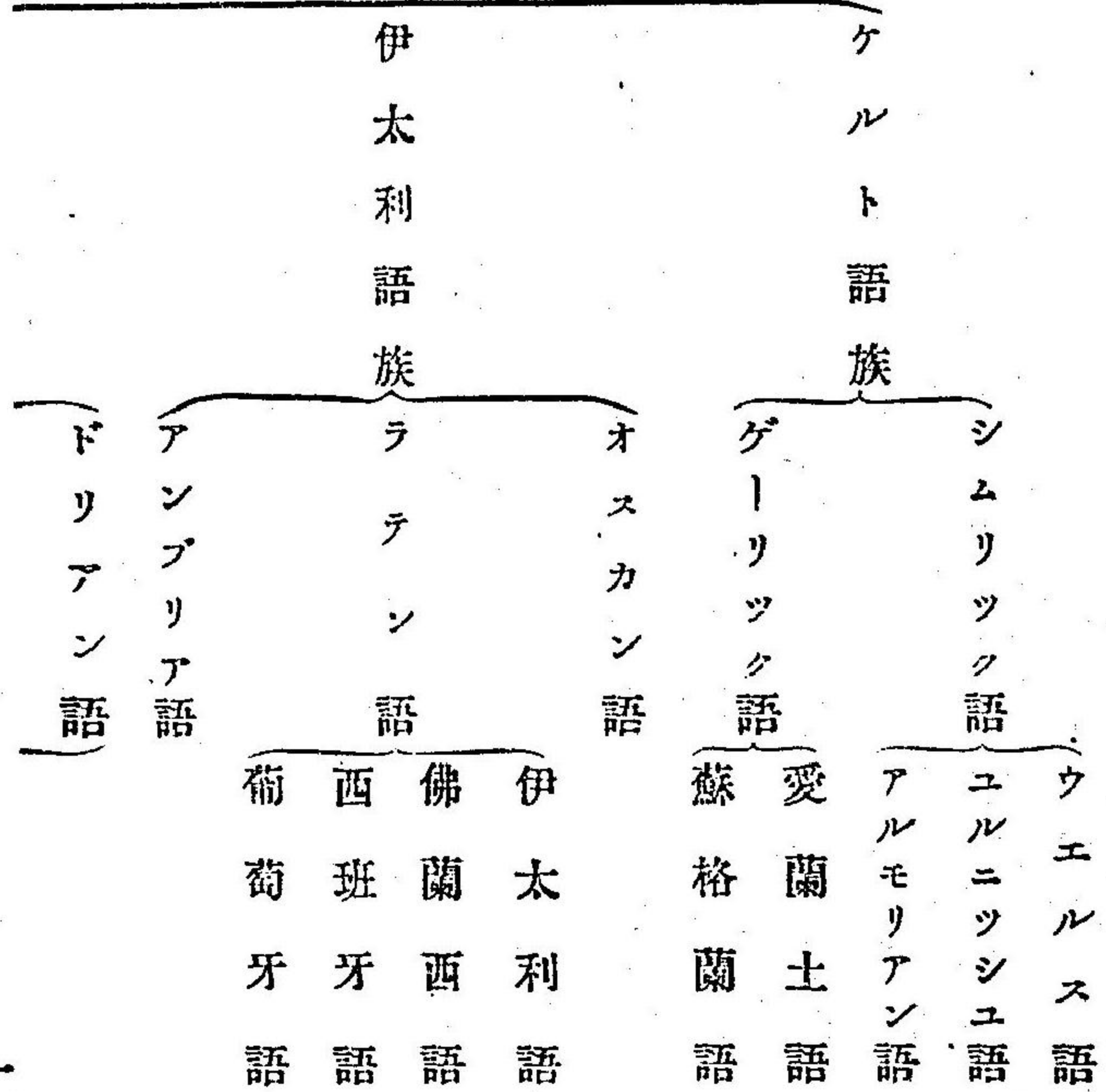
ヤン語は以上二族以外のもので蒙古、滿洲、土耳其並に支那、日本の語をも此の中に一括して居るのである。此の中發音に於てこそ差異あれ文字として同態なる支那、朝鮮等を除き語脈の異なるものを擧ぐればアールヤの言語とセムムの言語とである。セムの言語は古代に於ては相應に勢力を有したものであるが世界文明の發展の上より吾等に最も密接なるものを擧ぐればアールヤ語である。アールヤ語は東南に出るものは印度語、イラン語となり、西北に流るゝものはケルト語、伊太利語、ヘレニックク(希臘語)、レト、スラヴ語、チユートン語となつたので、マクス、ミユラーの著書により要を摘むで其の系統を示すと左の如くである。

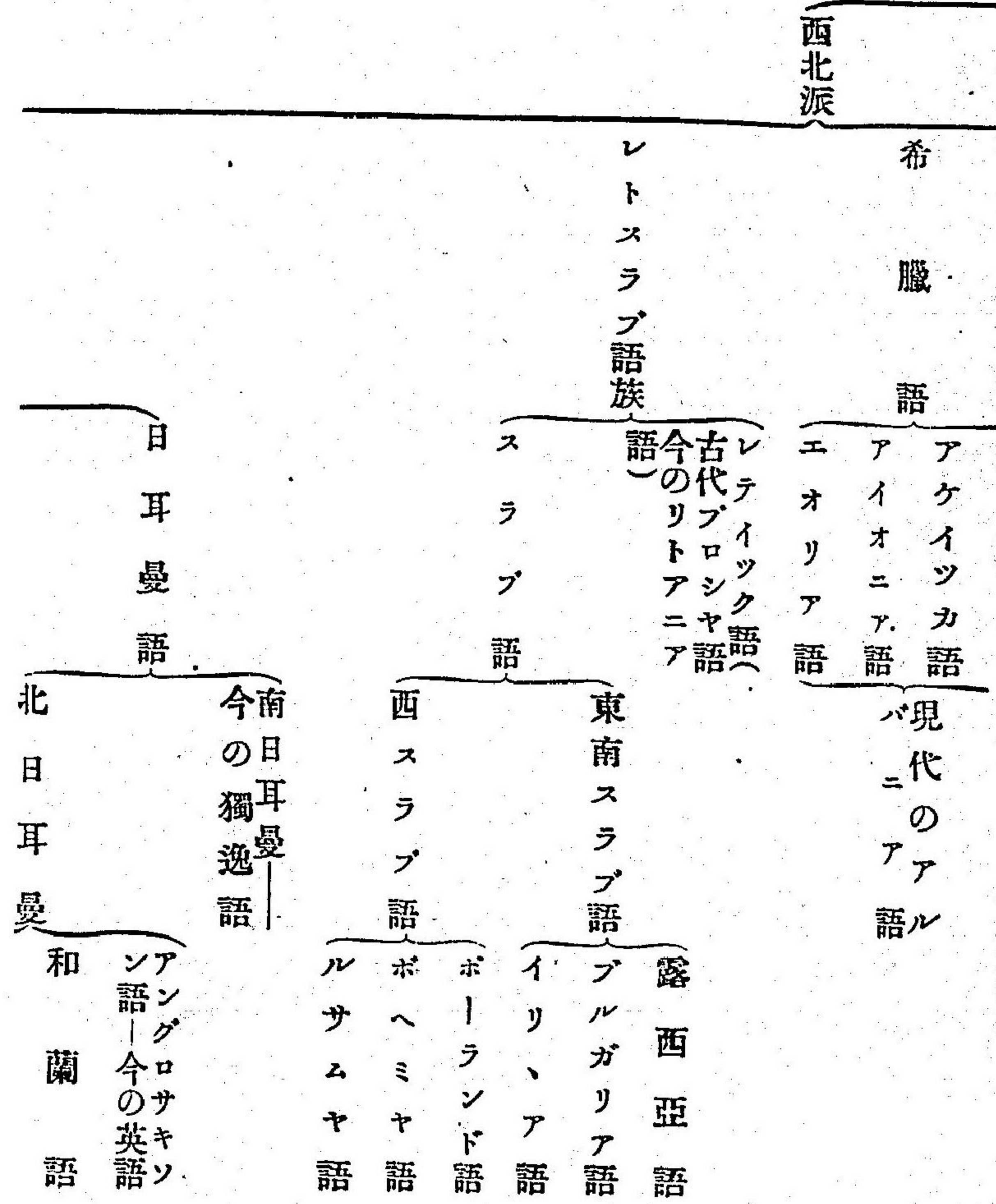
アールヤ系



ベルシヤ語
アルメニア語

印度歐羅巴語族





歐洲各國今日に於てこそ其の語異りと雖も其の源に遡れば皆同一の祖先から發したのであるから語脈文勢に於ても尙ほ其の面影を存するものがないでもない。例へば英語の父なる語Fatherはサクソン語のFoeder和蘭語のFader丁抹語のFader獨逸語のVaterラテン語のPater伊太利語のPadre佛蘭西語のPereの如きは其の一例で。これ、語脈文勢並に發音を異にせる我が國人の外國語研究に比して歐米人が多大の利便を有する所以である。即ち我れに於て一外國語を研究すると彼に於て數外國語を研究すると其の勢力に於て殆んど同じきものある所以である。併し既に一外國語を學習すれば第二第三と他に移るは

さしたる困難はないのであるが、語脈文勢發音の異なる邦人に數國語を兼修せよとは云ふべくして行はれ難きことであるから其の中先づ何れの國語を修むるを以て利便なりとすべきか、即ち學修すべき外國語の選擇は我が讀書子の指を外國語に染めんとするもの、劈頭に逢着する問題である。各國語には皆な各其の特色とする所あつて研究の學科によりて選ぶ所同じからざるは當然なれど一般に外國語として今日邦人に必要なるは英佛獨の三國語に過ぎたるはない、此の中流麗にして典雅なるは佛蘭西語に如くはなく精確にして學術的用語に適するは獨逸語を推すべきなるが併し最も實用的にして而かも世界各國に共通せらるゝものとしては英語を以て第一とせざるを得ない。佐藤顯理氏曾て英語の廣く世界に行はるゝ理由を述べて、

英語研究

- 一 英國が其の版圖世界に普き商業國として地球上到處英國人の勢力の扶植されたるの致す處 英國語を解するものは極めて便利を感ずる事。
- 二 其の語法單純にして記憶し易き事これなり、但し日本人に取りては英語は獨佛語に比し發音に於て六つかしけれど語法の變化少きを以て大

に入り易きなり。

といひ獨佛の二語は語法極めて複雑にして入り難きを説かれぬ 吾等は尙

ほ一二の理由を附加することが出来る、即ち

- 三 英語は既に云ふ如く世界語にして世界各國の作品は殆んど英語に翻譯せられたるが故に外國語の智識に乏しき邦人に最も便宜なる事。
- 四 英語は合成的言語にして其の初め北日耳曼の語なりしも早く佛蘭西語を融合し今や歐洲諸國の語を混在して其語を形成せるが故に他の國語を學ぶの楷たり梯たるの便少からざる事。

こは唯だ普通の讀書子に向て立言したるもの専門學修の士は其の學科に於て最も必要なる外國語を選び、之れによりて其の蘊奥を究むべきや固より論なし。兎に角吾等は我が讀書家が少くとも一二の外國語を修めて之れによりて邦人以外の思想を窺はれんことを慫慂して止まざるものである。

二 外國語の自修

外國語研
究の二目
的

外國語研究の必要は上來述る所の如し、さて次ぎに來る問題は外國語は元來自習し得べきや否や、更に言を換へて云へば讀書によりて學習し得べきや否やである。此の問題を解決するには先づ其の研究の目的に就て觀察せねばならぬ。凡そ外國語の研究には自ら二種の目的がある。一は、實用、其を主とするもの、他は讀書力養成を目的とするもの、前者は實際外國人に接して交際の上不便なからしめんとするが故に専ら耳と口とを慣らすにあるも、後者は文字を解して其の義を理會せんとするが故に要する所は目を慣らすにある。耳を慣らすには耳より入らざるべからず、口を慣らすには自ら發せざるべからず、耳と口とを主とする外國語は獨り自ら修めんとしては勞多くして功少く、却て變則の發音に慣れて實用に適せざるの患を遺すこと少からざれば其の目的前者にある時は自修は其の豫備たり若くは其の補習たるに止りて全然之れのみによりて成功せんとするは失敗なれど、其の目的後者に存して主として文字を解せんとするには自修は決して望みなきことにあらず。此の場合には發音語調等の苦心を除きて専ら字義の解釋にあれば充分の根氣と熱心とさ

自修難

自修の可
能

へあれば略ぼ書を読むに差支なきに至り得べからざるにあらねど、それとも之れを教師に就きて學習するに比せば勞多きこと勿論なれば其の目的の孰れにあるを問はず初めは教師に就きて學習すべきは正當の順序なれど萬一學ぶべき師なき場合若くは何等かの事情によりて師に就く能はざる場合も讀書力の養成のみは自修に於ても達し難いことではない。

若し外國語自修の不能を云ふものあらば、吾等は告ぐるに前野良澤の苦心談を以てせんとす、徳川幕府の代、外國語の研究は全く禁止せられて僅に長崎譯官等の片言隻語を記憶するのみ、豊前中津の人前野良澤、奮然として蘭語研究の志を起し齡四十七、幕府の儒臣青木昆陽の門を叩きて蘭語五百餘言を學び之れを基礎とし別に長崎の譯官より得たる蘭人マーリンの辭書を取て彼此校考し已に知る所によりて未だ知らざる所を推し漸くにして入手したる數部の醫書を讀破せんと企て苦心慘憺す、偶ま江戸千住に罪人臍分とて解剖の擧あり、良澤、杉田玄白、中川淳庵等の醫師と共に行き之れを見、懷より和蘭解剖の書を出し圖を開きて之れを究む、玄白も亦同書を懷にし共に五

蘭學事始

臓の配置の漢法醫書の云ふ所に異り和蘭解剖書の精確なるに驚き、如何かして之れを譯述せんと、僅に六七百の語に通せる前野良澤を盟主とし玄白、淳庵其他の諸子相會して之れに着手す、六七百の語は今日坊間の單語篇に於ても示されたるほどのもの、之れによつて學術上の大著を譯せんとす其の苦心は實に豫想の外である、杉田玄白の蘭學事始は其の時の状を記して、

扱て此書を読み始るに如何やうにして筆を立つべしと談じ合ひしに、とても始より内象の事は知れがたかるべし、此の書の最初に仰伏全象の圖あり、これは表部外象の事なり、其名處は皆知れたる事なれば、其圖と説の符號を合せ考ふことは取付きやすかるべし、圖の初とはいひ、かた／＼先づ之れより筆を取り初むべしと定めたりと、

人體外面の圖によりて其の名詞を考へ、それによりて解説を考へ讀みしと見えたり、さて、

其の頃は「デ」の「ヘット」の又「アルスウエルケ」等の助語の類も、何れが何やら心に落着て辨へぬ事故、少しづつ記憶せし説ありても、前後一向にわからぬ

事ばかりなり、譬へば眉といふものは目の上に生じたる毛なりとあるやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日にも明らめられず、日暮るゝまで考へ詰め、互ににらみ合せて僅か一二寸の文章一行も解し得ることならぬことにてありしなり、又或る日鼻の所にて「フルヘツヘンド」せしものなりといかにせんやうなし。其頃「ウォールデンブック」(釋辭書)といふものなし。やうやう長崎より良澤が求め歸りし簡略なる一小冊子ありしを見合たるに「フルヘツヘンド」の譯註に木の枝を断ちたる迹、其迹「フルヘツヘンド」をなし、又庭を掃除すれば其塵土聚り「フルヘツヘンド」といふ様によみ出せり、これは如何なるべくと、又例の如くこじつけ考へ合ふに辨へかねたり、時に翁(玄白)思ふに木の枝を断りたる迹、愈えて堆くなり、又掃除して塵土あつまればこれも堆くなるなり、鼻は面中に在りて堆起せるものなれば「フルヘツヘンド」は堆といふことなるべし。然れば此語は堆と譯しては如何といひければ、各これを聞て甚だ尤なり、堆と譯さば正當すべしと決定せり、其時

のうれしさは何にたとへんかたもなく、連城の壁をも得し心地せり云々。と、此の時に比せば今日は和譯の辭書に乏しからず又自修獨學に便なる書例へばプリンクリーの語學案内の如き類も少からざれば志だに固ければ自修して書を読む力を養ふは難事ではない。それには先づ内村鑑三氏の「外國語の研究」佐藤顯理氏の「英語研究法」高橋五郎氏の「英文熟達法等」によりて略ぼ指針を得漸次易より難に就く方法が最も簡便である。本書は是等の研究法を精叙するのが目的でないからこゝにブラツキの自修編中に於ける語學研究の中殊に讀書に關するもの二三を擧げて讀者の參考に資するに止めむ。

一。常に誦讀及び記述の諸練習を再三再四反覆すべし、語學初步の時代に於ては一讀を以て足れりとすべき一の書籍あることなし。

一。成る可く其の讀書をして常に汝の智識的慾望に親しからしめ、書中の事實に興味を感せしめよ、さらば汝は二倍の進歩を爲すことを得べし。開卷以前に於て書中の要目を知るは多大の補助を與ふるものたり。此の理により聖典を知る所の基督教徒には聖書の翻譯は外國語收得に於

ける最良の書たり。

一。國語の理論、話説の組織及び比較言語學と稱せらるるものを研究すべし、之れによりて汝は不規律なる記憶の困難を避け理論的才能を以て勉勵するの原則を得べし。

一。外國語を學ぶには第一に其の語と親密ならざるべからず、此親密は不斷の讀書と不斷の會話とによりて得るの外なし。若し説話すべき人なき時は自ら其身に高話すべし。語學の要は常に目によりて領解するのみならず亦耳と舌とによりて練習せざるべからざればなり。讀書に於ても亦定められたる書籍のみに限らず、手に觸るる所の各種の書を読むべし、唯だ一書を精讀するの可なるはさることながら其の國語の一般元素の中に大半生活することを學ばざるべからず、眞に外國の書を解せんには其の國語の一般普通のものに通曉せずんば細節を精確明瞭に知るを得ざるものなり、例へばシェクスピアの如きもこれを讀んで満足するに至らんには少くとも二十回以上は精讀せざるべからざる

が如し

毛釋黄が讀書の四要たる收、簡、專、恒は外國語の研究にも亦缺くべからざる注意である。

尙ほ一つ實際的簡便法として、外國語自修者の中に行はれて居るのは翻譯書参照法である。已に邦語に翻譯せられたるものを原書に就きて自修し、字を引き文を考へ、其の解し難きに至て初めて其翻譯書を出して、之れと對照して疑を質し、かくて外國文を読むの力を養ひて、後には未だ翻譯書なき原書に就く方法である。これは至極便利であるが、意志の弱いものは少しも自ら考ふることなく、又辭書を開するの面倒を避けて直に翻譯書と照すの弊を生じ、其の書は讀み得るとも、毫も外國語の力を増さざるの痴態に陥ること少なくないから、必ず自力を以て讀むの覺悟を以て、已むを得ざるにあらざれば参照せざることに注意せねばならぬ。

翻譯書の對照

第參章 書籍の分類

一 泰西の名著の選定

讀書法の二大問題たる如何なる書を読むべきか、如何なる方法を以て讀むべきかは略ぼ説述し了りたれど、尙ほ二三の遺れる問題あり、それは專修の學科に就ては人々其の赴く所を異にするが故に、此に其の書目を擧ぐる能はざれど、一般讀書家として如何なる書を読むべきか、又如何なる書を藏すべきかの問題にして、讀書法の補遺として一瞥を要すべきものたり、且又其の藏書を如何に整理し置くべきかも亦攻究を値する附屬問題である。若し是等の問題を等閑に付して手當り次第に書を読み、雜然として之れを藏せんか、其の讀書によりて得る所の興趣と利益とは一半を失ふのである。凡そ書籍の中には、

- 一 必らずしも讀むを要せざる書
- 二 必らず一讀すべき書
- 三 再三熟讀すべき書

書籍の類別

四 座右に藏すべき書

との區別がある。これも専修の學科によりて異同あるは云ふまでもなけれど、世間に有觸れたる雜著の類は必らずしも讀むを要せざれど第一流の書オ
 ーソリテイとなるべきものは是非一讀せざるべからず。例へば我が國の源氏
 物語の如きは専修以外の士といへども苟くも國文に眼を注ぐものゝ一讀すべ
 きものたる如き、又四書六經若くは聖書の類は再三熟讀すべきの部に屬し、
 辭書、叢書、百科全書の類は書齋の顧問として座右に供すべきの書たり、有
 名なる大英百科全書(Encyclopaedia Britannica)支那の淵鑑類函の如きは學者の座右
 に缺くべからざるものである。併しこれらは讀むべきものでなく要に應じて
 參照すべきものであるから今は彼の有名なるサー、ジョン、ラポックが百冊
 に垂んとする有益なる書籍を擧げて讀書家の參考に資せんとして推賞せるもの
 を引用して讀書の架とせんに、

ラポックの
百冊

- 聖書(The Bible)
- マーカス、アウレリアヌス冥想錄(Marcus Aurelius "Meditation")

- エピクテトスの教訓(Epictetus)
- サンチラールの佛陀及佛敎 St. Hilaire's "Le Bouddha et la Religion."
- アリストートルの倫理學(Aristotle's "Ethics.")
- マホメットのコーラン經(Mahomet's "Koran.")
- ウエークのアポスリック、フアーザーン(Wake's "Apostolic Fathers.")
- セント、アウガスチン懺悔錄(St. Augustine's "Confession.")
- トマス、アケンビスの基督の模倣(Thomas à Kempis "Imitation of Christ.")
- パスカルのペンシエス(Pascal's "Pensées.")
- スピノザのトラクタートゥス、テオロギコ、ポリテイタニス
(Spinoza's "Tractatus Theologico-Politicus.")
- コントのカテキイイズム、オヴ、ポジテイヴ、フイロソフイー
(Comte's "Catechism of Positive Philosophy.")
- バトラーのアナロジイ、オヴ、レリジヨン(Butler's "Analogy of Religion.")
- ゼレミー、テールホルのホーリー、リー、ヴァイング、アノド、ホーリー、ダイイング

書籍の分類

(Jeremy Taylor's "Holy Living and Holy Dying.")

○ バンヤンの天路歷程 (Bunyan's "Pilgrim's Progress.")

クエブルのクリスチャン・イヤー (Keble's "Christian Year.")

○ プラトリーのダイヤローグ (Plato's "Dialogues.") (全八巻、そのうち第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八の諸篇)

・ アリストートルの政治學 (Aristotle's "Politics.")

・ クセノフォンのメモラビリア (Xenophon's "Memorabilia.")

・ デモスセニスのデ・コロナ (Demosthenes' "De Corona.")

・ シセロのド・オフィシス、ド・アミチチア、及び、セネカ・テート

(Cicero's "De Officiis"; "De Amicitia" and "De Senectute.")

・ バークレーのヒューマン・ナレッジ (Berkeley's "Human Knowledge.")

・ デカルトのデスコール、シユル・ラ・メトード

(Descartes' "Discours sur la Methode")

・ ロックのオン・ザ・コンダクタ・オブ・ザ・ヒューマン・アンダースタンディング

(Lock's "On the Conduct of the Human Understanding.")

○ プリエータークの英雄傳 (Pharoah's "Lives.")

・ ホーマーのイリヤッド及オディッセイ (Homer's "Iliad" and "Odyssey")

・ ヘシオッドのワーク・アンド・デイ (Hesiod's "Works and Day.")

・ バージルのエーネイド、及び、シヨルシニクス (Virgil's "Aeneid" "Georgics")

・ マハバーラタ及びラーマ・ヤーナ (Mahabharata and Ramayana)

(マハバーラタ及びラーマ・ヤーナの印度史の初めに巻に摘要を収めたもの)

・ ザ・ニibelungenリイド ("The Nibelungenlied")

・ マロリーのモルト・ダ・アーサー (Malory's "Morte D'Arthur")

・ ファイルダウ・シイのシャナメー (Firdausi's "Shahnameh")

(アトキンソンの註)

○ 詩經 ("The Shih-king," Chinese Odes)

○ カリーダーサーのシヤークンターラ (サロマトリンタ)

(Kalidasa's "Sikuntala" or "The Lost Ring.")

・ エスキュラスのプロメテウス。ハウス・オブ・アトロイヌ。トリロジイ、オ

書籍の分類

ヴ、オレヌテヌ(Aeschylus's "Prometheus"; "Home of Atreus"; "Trilogy of Orestes")
ソホクリースのオーディプス Sophocles "Oedipus."
エウリピデースのメデア(Euripides's "Medea")
アリストファネスのザナイト。及ザ、クラウヌ

(Aristophanes's The "Knight;" "The Clouds.")

ホーレエヌの歌集(Hornac's "Odes")

チョーサーの坎タマブレーテールヌ(Chaucer's "Canterbury Tales")

○シエークスピア(Shakespeare)

○ミルトンのパラダイム、ロスト。リンダヌ。コーヤヌ。及び短詩

(Milton's "Paradise Lost;" "Lyceus;" "Comus;" The shorter poems.)

ダンテのデヴィナコメヂヤ(Dante's "Divina Commedia.")

スペンサーのフェアリークイーン(Spencer's "Faerie Queen.")

ドライデンの詩集(Dryden's poems.)

スコットの詩集(Scott's poems.)

ヴォーズウォルヌ詩集(Wardsworth.)

ボープのエッセイ、オヴ、クリティシズム。エッセイ、オヴ、マン。及びレーブ、オ

ヴ、ザ、ロッシュ(Pope's "Essay on Criticism;" "Essay on Man;" "Rape of the Lock.")

○バイロンのチャイルド、ハローヌ(Byron's "Child Harold.")

テニソンの詩集(Tennyson's poems.)

グレイの詩集(Grey.)

バーンスの詩集(Burns.)

ヘロドタヌ(Herodotus.)

ゼノフォンのアナバシス(Zenophon's "Anabasis.")

チユシイダイデーヌ(Thucydides.)

タシタヌのゲルマニア(Tacitus's "Germania.")

ライビー(Livy.)

ギボンの羅馬衰亡史(Gibbon's "Decline and Fall of the Roman Empire.")

ヒュームの英國史(Hume's "History of England.")

- グロートの希臘史(Grote's "History of Greece.")
- カーライルの佛蘭西革命史(Carlyle's "French Revolution.")
- グリーンの英國小史(Green's "Short History of England.")
- レウイスの哲學史(Lewis's "History of Philosophy.")
- ベーコンのノーブルサム・オルガナム(Becon's "Novum Organum.")
- ミルの論理及經濟書(Mill's Logic and Political Economy.)
- ダーウインの生物始源及ナチュラリスムニチャーム
(Darwin's "Origin of Species" "A Naturalist's Voyage.")
- スミスの富國論(Smith's "Wealth of Nations.")の一部分について
クックの航海記(Cook's "Voyages.")
- フンボルトの旅行記(Humboldt's "Travels.")
- ホワイトのナチュラリスムニチャーム
(White's "Natural History of Selborne.")
- アラビヤン・ナイツ("The Arabian Nights.")

- ゴールドスミスのヱイカー・オヴ・ウインター・ノイズ
(Goldsmith's "Vicar of Wakefield.")
- スイフトのガリヴァー旅行記(Swift's "Gulliver's Travels.")
- デフォーのロビンソン・クルソー(Defoe's "Robinson Crusoe.")
- セルバンテスのドン・キホーテ(Cervantes' "Don Quixote.")
- ボスウェルのライフ・オヴ・ジョンソン(Boswell's "Life of Johnson.")
- バークの論集(Burk. Select Works.)
- カーライルのパスト・アンド・プレゼント(Carlyle's "Past and Present")
- スマイルズの自助論(Smiles' "Self-Help.")
- ベーコンの論文(Bacon.)
- アディソンの論文(Addison.)
- ヒュームの論文(Hume.)
- モンテーニュの論文(Montaigne.)
- マコーレーの論文(Macaulay.)

○エマーソンの論文(Emerson.)

モリエルの戯曲(Moliere's Dramatic Works)

シエリダンのザクリテッタ。スタイル、フオア、スカンダル。及ザライバル

ス(Sheridan's "The Critic," "School for Scandal," "The Rival.")

○シルレルのウイヘルム・テル(Schiller's "Wilhelm Tell.")

ヴォルテールのザディグ及ミタロメガス(Voltaire's "Zadig," "Aleronagus.")

○ゲーテのファウスト及び自叙傳(Goethe's "Faust," "Autobiography.")

サツカレートのバニライ、フエア及ペンデニヒス

(Thackeray's "Vanity Fair," "Pendennis.")

○ディッケンズのピックウイック及ダビッド・カマン・フイールド

(Dickens's "Pickwick," "David Copperfield.")

ジョージエリオットのアダム・ボード(George Eliot's "Adam Bede.")

キングスレーのウエストウォード・ホー(Kingsley's "Westward Ho.")

リットンのラストデイ、オヴ・ポンペイ(Lytton's "Last Day of Pompeii.")

○スコットの小説(Scott's Novels.)

○印あるは全部翻譯若くは一部分の翻譯あるもの

以上はラポックが全體各々通讀の價值ありと認めし百書を選定したのであるが、これらの書を悉く讀破せんは非常の困難である。彼のラスキンは之れを評してラポックの選定せる目錄中の廢物を自由に削除するも猶ほ一生を通じて自由に讀むに足るものあり、眞に研學に不足なきほどを選ぶべきをいひ道德神學信仰に關する書の中にはゼレミーテールの著書と天路歷程とを遺し、哲學者の間に於ては獨りベーコンを取り、小説家にてはスコット、ディッケンズ、論文家にてはアデイソンとモンテインとを取りたり、人々其の見を異にし其の好む所を同うしないから萬人向きに選定するのは頗る困難の事である。

一昨年伊佛の評論界に於て最も進歩せりと稱せらるる「エコノビウム」誌は避暑中に讀むべき書籍を選定して圖書室を設けんには如何なる書を選ぶべきかを第一、哲學、一般科學、第二、宗教道德等、第三、純文學の三項に分ちて

ラスキンの評言

泰西四十名著

普く佛伊の學者文人に解答を求めしに其の結果一百以上の解答集り八百の著書と八千の著作は選ばれしが其の中最も高點なりし著者の名を得點の順により擧げんに

- 1 ダンテ、
- 2 ライトー、
- 3 ユーゴー、
- 4 バスカル、
- 5 モンテーン、
- 6 レナン、
- 7 ダーウイン、
- 8 セント、アウガスチン、
- 9 バルザック、
- 10 ハイネ、
- 11 エスキュラス、
- 12 シエクスピヤ、
- 13 ゲーテ、
- 14 ホーマー、
- 15 スピノサ、
- 16 トルストイ、
- 17 ヴオルテール、
- 18 フローベル、
- 19 ニイチエ、
- 20 カーライル、
- 21 ルソー、
- 22 カルデニッチ、
- 23 聖書、
- 24 マーカス、アウレリアス、
- 25 セルバンテス、
- 26 カント、
- 27 ショウペンハウエル、
- 28 レオバルデ、
- 29 ソホクレス、
- 30 モリエル、
- 31 ハーバート、スペンサー、
- 32 エピクテタス、
- 33 エルギリウス、

エリオットの選定

諸氏の著書であつた。近頃、亞米利加ハーバート大學のエリオット氏は五尺の書架に保存し得べく且つ何人も之れによりて趣味と實益とを得べき書籍を選定して示されたのは、

- ベンジャミンフランクリンの自叙傳 (“Autobiography of Benjamin Franklin.”)
- ジョン、ウールマンの旅行記 (“Journal of John Woolman.”)
- ウィリヤムペンのフルーッ、オヴ、ソリテユード (“Fruits of Solitude,” by William Penn.)
- ベーコンの評論及びニユウアトランテック (“Bacon's ‘Essays,’ and ‘New Atlantic.’”)
- ミルトンのアレオバギイテカ及びトラクテート、オン、エデュケーション (“Milton's ‘Areopagitica,’ and ‘Tractate on Education.’”)

サー、トマス、ブラウンのレリジオメデイシイ

(Sir Thomas Browne's "Religio Medici.")

○ プラトーのアポロジ、フマイエデー及クリトー

(Plato's "Apology," "Placlo," and "Crito.")

○ エピクテタスのユールド、ン、セーネン、("Goldensayngs" of Epictetus.)

マールカスアウレリアの冥想録("Meditation," of Marcus Aurelius.)

エマーソンの文集(Emerson's "Essays.")

エマーソンのイングリッシュエッセイ、エッセイ、("Emerson's English Traits.")

ミルトンの詩集(The Complete poems of Milton.)

ジョンソンのヴォルホーン(Jonson's "Volpone.")

ビーモント及フレッチャーのザ、メー、ン、ト、ラ、シ、ト、ネ、ト

(Beunmont and Fletcher's "The Maids Tragedy.")

ウェブスターのダッチエッセイ、ウェブスターの"Duchess of Malfi.")

ミドルトンのギ、チャ、ン、シ、エ、リ、ン、("Middleton's "The Changeling.")

ドライデンのオール、ン、コ、ラ、ン、("Dryden's "All for Love.")

シェーレイのセン、ン、("Shelley's "Cenci.")

ブラウニングのブロット、ン、("Browning's "Blot in the Scutcheon.")

(Browning's "Blot in the Scutcheon.")

テニンソンのパケット(Tennyson's Becket.)

○ ゲーテのファウスト(Goethe's Faust.)

マールローのドクトル、ン、("Marlow's Dr Faustus.")

○ アダムスミスの富國論(Adam Smith's Wealth of Nations.)

シセロ及びプリニーの書簡("Letters," of Cicero and Pliny.)

○ バンヤンの天路歷程(Bunyan's "Piligrims Progress.")

バーンスのタム、オ、シ、ヤ、ン、タ、ー(Burns's Tam O' Shanter.)

ウォルトンのコムブレイト、ン、("Walton's "Complent Anglar," and "Lives," of Donn and Herbert.)

(Walton's "Complent Anglar," and "Lives," of Donn and Herbert.)

セント、オ、ウ、カ、ス、ケ、ン、の、自、叙、傳、("Autobiography of St Augustin.")

○ブリュネタークの英雄傳 (Pulchri's Lives.)

ドライデンのエニイド (Dryden's "Zaïd.")

トーマス・アケンビスの基督の模倣 (Imitation of Christ, by Thomas A Kempis.)

カンターベエリー物語 (Canterbury Tales.)

ダンテのデヴィンコメデー (Dante's "Divin Comedy.")

○ダーウインの生物始源 (Darwin's "Origin of Species.")

○アラビヤシナイト ("Arabian night.")

○印を付たるは全部若くは一部の翻譯あるもの

こは殊に五尺の書架に限られたると且つ聖書並にシエクスピヤーは多くの人に讀まれつゝあるが故に除いたので、此二書を除外したのではないと付言してある。これらは皆な泰西の書籍に造詣深い人々が單に一讀すべきのみならず再三熟讀すべく又は座右に備ふべき書として選定せられたる名著で宇内幾億の書籍の中から殊に選擇せられたるものであるから其の後進を誘掖することも少くないは勿論であるが東洋の名著に對しては全く除外せられて居る。

更に東洋の名著に就て先人の説を見ねばならぬ。

二 和漢名著の選定

經典

青木昆陽の漫録に天爵堂筆録を引ている六經、二十一史、文章、茲にあり、經濟も亦茲にあり、當に讀むべきの書此に盡く、此外は即ち諸子、亦經史の鼓吹のみ、讀む固より可なり、讀まざるも妨げずと、蓋し六經二十一史は支那學の根底にして當に讀むべきの書とするは古來の定論なるが如し、六經とは詩、書、禮、樂の四に易と春秋とを加へたるものにて此の中樂を除きて五經としたるは漢儒班固の説で宋に至りて朱子、禮記中の一節たる大學と中庸とを抜き之れに論語と孟子とを加へて、四書とし、漢唐の舊に依りて詩經、書經、禮記、易經、春秋を五經とし四書五經は漢學者必讀の書たり。二十一史といふは

二十一史

史記(司馬遷)

前漢書(班固)

後漢書(花暉)

三國史(陳壽)

書籍の分類

晋 書(房玄齡)	宋 書(沈約)
南齊書(蕭子顯)	梁 書(姚思廉)
陳 書(同 上)	後魏書(魏 收)
北齊書(李百藥)	周 書(令孤德莖)
隋 書(魏徵等)	南 史(李延壽)
北 史(同 上)	唐 書(歐陽修)
五代史(同 上)	遼 史(托克托)
金 史(同 上)	宋 史(同 上)
元 史(宋 濂)	

の二十一書を指し、これに張廷玉の明史を加へて二十二史とするので、皆なこれ支那歴代の史實を記したものである。若し夫れ同一人の著書で支那の歴史を通観するには戰國の時代より五代に至るまで一千三百有餘年の事蹟を宋の司馬光の編述した資治通鑑二百九十四卷、清の畢沅が宋、遼、金、元、四朝の正史を主として著はした續資治通鑑二百二十二卷が價値ある書籍として尊重せ

られる。

諸子とは所謂百家九流の學にして百といへるは單に數の多きを示したので必らずしも百のみではない、漢書の藝文志によると儒家者流五十三家、道家者流三十七家、陰陽家者流二十一家、法家者流十家、名家者流七家、墨家者流六家、縱橫家者流十二家、雜家者流二十家、農家者流九家、之れを稱して九流といひ、外に小説家十五家を擧げてあるが支那では稗史小説を學者の見べきものでないと排斥したから諸子十家其の觀るべきものは九家のみといふてある、其の中支那思想の中堅となつたのは孔孟の說を祖述した儒家者流で、之れに次ぐは老莊の說を祖述した道家者流、此の外管子、商子、申子、韓非子の法家者流並に墨子を祖述する墨家者流も其の思想を窺ふに於て缺くべからざるものである。兎に角、支那の書籍は經と史と子に屬すべきものとに分つことが出來、其の中、經を第一とし史之れに次ぎ子は讀まざるも可なりと見たのが天爵堂筆録の言である。和漢の書籍に就ては未だラポックの百書選定の如き擧なけれど、文化年中に古賀侗庵が門弟の讀書法を問ふに對し

て答へた讀書矩の一篇は能く名著を網羅して讀むべきの順序を開示したものである。先づ一、經書に屬するものと、二、歴史に關するものと、三、子集並に雜著に關するものとの三に分ち、其の三を更に入門の學、上堂の學、入室の學とに分ち、入門の學としては

入門の書

一 經書に關するもの

四書集註

學庸或問

詩經集傳

書經蔡傳

左傳杜註

周易本義

禮記集說

四書五經左傳の本文は瑣瑣して讀むべし、就中四書詩易左傳最も宜し、屢ば詩を讀んで誦を成さしむべし、此れ終身の業、初學の爲のみならず、而して經中の語大抵語記し、彙中に物を探ぐるが如くなれば、則ち學進む

論語或問

論孟精義

中庸輯略

詩經古註

詩傳遺說

書經孔傳

周易程傳

文公易說

本義通釋

春秋胡傳

公羊傳

穀梁傳

孝經孔傳

爾雅

國語

周禮

儀禮

大戴禮

大學衍義

二 歴史に關するもの

史記

漢書

稽古錄

三國志

歴史綱鑑

資治通鑑

後漢書

晉書

南史

北史

五代史

續通鑑

唐鑑

三 子集並に雜著に屬するもの

小學

莊子

楚辭

唐詩正聲

文章軌範

忠孝の心を養ふ

此二書汎讀多きを厭はず

書籍の分類

莊子楚辭、暇あれば輒ち反覆誦讀すべし、莊は以て狹陋の見を廣し、楚辭は以て

讀書と自修

老子

列子

戰國策

荀子

近思錄

韓非子

呂覽

淮南子

七書(孫へし熟讀)

文選

孔子家語

唐詩品彙

八大家文鈔

杜律

杜詩全集

韓文公集

二程全書

語類

世說

說苑

東萊博議

上堂の書

上堂の學としては

一 經書に關するもの

論語古註

禮記古註

詩本義

讀詩記

尚書大傳

尚書砭蔡編

韓詩外傳

四書輯釋

四書纂疏

四書大全

四書存疑

四書議說

四書蒙引

四書直解

詩經說約

四書通

四書釋地

陸璣草木疏

左傳付註

左傳辯談

李鼎祚易解

欽定周易折衷

易學啓蒙

啓蒙通釋

孟子古註

易經古註

禮記義疏

春秋釋例

二 歴史に關するもの

新唐書

宋書

齊書

梁書

陳書

魏書

北齊書

周書

隋書

通鑑綱目

穆天子傳

竹書紀年

逸周書

明史紀事本末

三朝實錄探要

八家集

日本史

逸史

讀史餘論

史通

讀史管見

三 子集並に雜著に屬するもの

書籍の分類

讀書と自修

管子

新序

列女傳

楊子法言

朱文公集

文章正宗

王充論衡

白虎通

風俗通

山海經

抱朴子

文中子

鹽鐵論

周子全書

張子全書

墨子(商子、鬼谷子)

莊子郭註

孔叢子

容齊五筆

困學紀聞

柳々州集

李太白集

貞觀正要

陸空公奏議

天經或問

周髀等經

傷寒論

素問

丹鉛錄

朱子遺書

說郭

稗海

文公筆錄

入室の書

入室の學としては示すこと更に多し

一 經書に關するもの

經解(經解中、群書名目、衆夥にして具に載するに暇あり、其の讀むべきものを擇んで具に載するに暇あり)

五雅

爾雅翼

詩童子問

盤典釋文(擇)

松陽講義

周易本義辯證

周易訂詁

世本古義

經學五書

毛西河經說

儀禮經傳通解(擇)

說文(擇)

詩緝

通雅(擇)

三禮圖(觀)

易纂言

古微書(擇)

尚書古文疏證

四書諸儒輯要(擇)

異同條辯(擇)

三魚堂大全(擇)

大學衍義補(擇)

禹貢錙指

詩經傳說彙纂

書經傳說彙纂

經義考(擇)

九經全解(擇)

二 歴史に關するもの

宋史

遼史

金史

元史

契丹國志

大金國志

宋遺民錄

明史

東萃錄

鄭成功傳

明李遺聞

萬曆三大征考

書籍の分類

- 通鑑前編
- 通鑑考異
- 十七史纂
- 路史
- 綏冠紀略
- 杜氏通典(擇)
- 唐六典
- 西域聞見錄
- 殊域周咨錄
- 印度志
- 大事記
- 名臣言行錄
- 史記論文
- 世史正綱
- 弘簡錄
- 文献通考(擇)
- 中山傳信錄
- 東國通鑑
- 龍威秘書(第九帙)
- 清一統志(擇)
- 通鑑外記
- 兩漢列誤補遺
- 水經
- 十國春秋
- 狐樹哀談
- 通志略
- 琉球國史略
- 增補采覽異言
- 魯西亞本紀

腐儒の通病は夜郎自大に任して外國の情狀に通ぜず以上の諸書を讀み以て其の拘虛の見を破るべし

- 六國史
- 太平記
- 平家物語
- 前太平記
- 東鑑(擇)
- 前々太平記

- 後太平記
- 太閤記
- 朝鮮征伐記
- 藩翰譜
- 北條九代記
- 三秘錄
- 甲陽軍鑑
- 關原軍記
- 本朝通紀
- 異稱日本傳
- 九州軍記
- 信長記
- 難波戰記
- 島原合戰記
- 保元平治物語
- 應仁記

三 子集并に雜著に屬するもの

- 太平廣記(擇)
- 列仙傳
- 漢魏百三名家集
- 王臨川集
- 陸象山集
- 方正學集
- 李崆洞集
- 津逮秘書
- 白樂天集
- 歐陽公集
- 李忠定公集
- 陳龍川集
- 王陽明全集
- 唐荆川集
- 三家詩話
- 李義山集
- 東坡全集
- 楊龜山集
- 葉水心集
- 弁州四部稿(擇)
- 歸震川集

- | | | |
|--------|----------|-----------|
| 方望溪集 | 經史問答 | 黃史白抄(擇) |
| 郁離子 | 匡謬正俗 | 夷堅志 |
| 文心彫龍 | 齊民要術 | 漢魏叢書(擇) |
| 徐冬序錄 | 筆叢 | 武備志(擇) |
| 何氏語林 | 性理大全(擇) | 七修類稿 |
| 丙山墨談 | 稗言 | 琅琊代醉篇 |
| 五雜俎 | 日知錄 | 古詩紀 |
| 全唐詩(擇) | 文苑英華(擇) | 宋文鑑 |
| 元文類(擇) | 明文海(擇) | 清詩別裁 |
| 清四大家詩鈔 | 列朝詩集(擇) | 明詩綜 |
| 稗海 | 玉海 | 陔餘叢考 |
| 明世說 | 菽園雜記 | 虞初新志 |
| 學齊佔俾 | 秘笈(擇) | 稗編(擇) |
| 十大家文鈔 | 武英殿叢書(擇) | 知不足齋叢書(擇) |

- | | | |
|-----------|---------|---------|
| 物理小識 | 本草綱目(擇) | 肘後方 |
| 金匱要略 | 千金方 | 曆算全書(擇) |
| 維摩經 | 楞嚴經 | 讀書錄 |
| 四庫全書提要(擇) | 徂徠集 | 白石詩稿 |
| 說殿集 | 白石叢書(擇) | 非微 |
| 駁臺雜話 | 政談 | 經濟錄 |
| 鳩巢逸話 | 大學或問 | 遺老物語 |
| 盍簪錄 | 南留別志 | 惕齋筆記 |
| 叙說 | 制度通(擇) | 同義解(擇) |
| 江家次第(擇) | | |

和書讀むべきもの尙ほ多し今其一二の切近なるものを録す

以上を列記の後、著者洞庵は付記していふ、「學者三等を経歴せば則ち基本既に固く識見既に明かなり、群書の真妄是非淺深高下、一覽して瞭然たり、唯だ心の欲する所に從て復た舛錯の慮なし學者果して能く此の地位に躋らば

評書炬の

子の教へ能ふ所にあらざるなり、故に三等以上予更に復た炬を設けず」と、此の時代に於てこれだけの書を讀破したらば確かに學者と稱することが出來たに相違ない、否な今日でもこれだけの書を讀むたならば漢學に於て造詣頗る深いものと云はねばならぬ。著者は漢學者であるだけに(多少朱子學に偏して陽明學派の書籍を擧ぐることに少い傾向があるが)先づ漢籍の方では名著を網羅して遺憾なしと稱すべきも、國文國史の書籍に至ては殆んど等閑に付されて最古の物語といはるゝ竹取物語、國文學の代表的著述たる源氏物語、枕艸紙等を逸し、鎌倉時代の文學に於て有名な徒然艸や方丈記をも加へず、國史は六國史と大日本史との外は正史と目すべからざる書多く、漢詩の方には多くの書を示したが和歌に至ては萬葉集古今集を初めとして總て不問に付し俳諧の如きに至ては殆んど見向きもせなかつたのであらう。殊に佛書は維摩楞嚴の二經をのみ擧げて釋尊の根本精神とまで云はるゝ法華經、華嚴經等を逸し禪文學の好標本たる碧巖集を除いた如きは當時の儒者として止むなきことなれど吾等は和漢の名著を算するとしては是等の書を忘るゝことは出來ない。

現代の書籍

併しこれは止むなき白壁の微瑕で和漢多くの書籍の中より順序を立てゝこれだけの書を選むだ古賀侗庵の功は頗る大なるものである。明治になつてからは書籍の刊行頗る盛んに殊に近年百科全書風の書籍も續出でゝ吾等を利用すること少からず、其の讀むべしと指定し得べき書に至ても日々新聞紙上に廣告せらるゝのみにても其の數頗る少からぬのであるから此の際具體的に一々書名を擧げて之れを詮衡するのは必要なことであるが現存著者の著述に對しては之れを品隲すること難く、且つ學說の進歩は昨の良書をして今の不良書たらしむることなき能はざれば一般讀者に推薦するに當て大に躊躇するのであるが、哲學并に一般科學の著述として大西祝氏の西洋哲學史、丘淺次郎氏の進化論講話、黒岩周六氏の天人論、道德宗教に關するものとして井上哲次郎氏の勅語衍義、福澤諭吉氏の福翁百話、大内青巖氏の碧巖集講話、坪内雄藏氏の通俗倫理談、歴史として重野安釋氏等の國史眼、黒板氏の國史の研究、竹越與三郎氏の二千五百年史、文學の書として芳賀矢一氏の選になる國文學歴史代選、創作に於ては尾崎紅葉、幸田露伴、國木田獨

歩、徳富蘆花、坪内雄藏、森鷗外、二葉亭四迷、夏目漱石諸氏の作品を推すには何人も異論なき所であらう、専門の學科に於ては各其の科目に對する好著も出版せられて文質彬々駄作も多いが名著に富むのも現代が實に空前の盛時であらう、讀者は須く第二章に於て指定したる選擇の標準に従ひ隨意に選定して其の好む所に從へといふの外はない。

三 書籍の整理

机上僅に五六の書のみを藏するものには別に整理し分類するの必要を認めざるも、積んで數十卷の書となれば既讀と未讀と常に座右に存すべきものと高閣に束ぬるも差支なきものとの區別を生じ、更に數百となり數千となるに至ては如何に記憶の強固なるものも尙ほ其の所在に迷ふことなき能はず。よし記性に於て差支なしとするも、紛然雜然として之れを藏せんよりは秩序を正し區別を明にして之れを藏するの搜索に於ても研究に於ても、便利なるは今更ら言ふまでもなければ、古來書を藏する人々の何等かの方法に於て分類

頭字分類法

せざるはない。其の最も多く行はるゝものは、

一 頭字分類法 此は頭字のいろは順によりて分類排列するものにして自ら二種に分る、一は書名をいろは別にするものにして他は著者の名によりていろは別に整理するのである。此の分類法は書名を知りつゝ其の所在に迷ふ時若くは何某の著書を見んとする時などに便利なれど研究自修に於て未だ充分なりといふことは出來ない。

時代分類法

二 時代分類法 著書の時代によりて分類し甲は十八世紀の出版物、乙は十九世紀と區別し、若くは丙は千九百九年丁は千九百十年といふ風に分ちて排列するにて、學說の推移を知るに便少からざれど實際研究の場合に於て某書は何年の出版にして某書は其の前年なりしなどと記憶するものには可なれど、此法は他の分類によりて排列したるを更に整理するとしては可なれど、これのみにて藏書を整理せんとするは失敗に歸するを免れない、此の分類の一種とも見るべきは購入の年代順に分類するにて、これは自己の思想の推移を見るに於て興味多きものにて

彼の書は予が何歳の時に購ひ、此書は何歳の時に讀みたりといふは思ひ出多けれど研究に於て便多きものではない。

三 學科分類法 其の記述の題目によりて分類するにて宗教のことを調ぶるには何々の書あり、數學のことは見るには何々の書ありと、一目瞭然たらしむる法にして多數の書を藏するもの、採用すべき分類法である。

藏書數の多寡により其の分類も精粗の區別あるべけれど此の學科分類法は研究自修の上にも其の功少からざるを認むれば、今、煩を厭はず、帝國圖書館等の分類法を斟酌して左に學科の分類を示さんに、

學科の分類

- 一 宗教
 - 甲 總説(宗教學、宗教哲學、宗教史、比較宗教學等)
 - 乙 神道
 - 丙 佛教
 - イ 佛教史及び傳記 □ 佛教教理(一般佛教教理に關する書及び各宗特殊の書籍) ハ 雜記

二 哲學

- 丁 基督教及び其他の宗教(書籍の多寡により更に更)
- 甲 總説
 - イ 哲學史並に概論 □ 西洋哲學(古代と近世とを分つ最も便なり) ハ 東洋哲學(印度と那とを分するを得)
 - 乙 心理
 - 丙 論理
 - 丁 倫理
 - イ 倫理學及び倫理史 □ 教訓 ハ 言行錄 ニ 禮式
- 三 教育
 - 甲 總説
 - イ 教育學 □ 教育史
 - 乙 實地教育
 - イ 學校管理法 □ 教授法 ハ 女子教育 ニ 幼稚教育 ホ 學

書籍の分類

校衛生 へ 學制

四 文學

甲 總說

イ 文學論(比較文學、文學論等凡て文學其者に關する書籍) □ 文學史(これに國別若くは時)

乙 修辭學(此の中に詩話文話を含ましも可なり)

丙 詩文

イ 和文 □ 和歌 ハ 俳諧(狂句狂歌と含) ニ 漢文 ホ 漢詩

へ 西洋詩文

丁 戲曲小説

イ 戲曲脚本 □ 俗曲 ハ 謠曲 ニ 小説(人情本物語本をも含む)

五 語學

甲 言語學

乙 文法

丙 語學研究書

丁 字書

六 歴史

甲 史學

乙 本邦史(國史、雜史、考證等)

丙 外國史

イ 西洋史 □ 東洋史

丁 年表

戊 傳記

イ 本邦人傳記(多に數ある時は時代分類) □ 外國人傳記(上同)

七 地理

甲 總說(地理其者に就て記述するも地理學、地人論の類)

乙 萬國地理

丙 本邦地理

丁 地圖

書籍の分類

戊 紀行(案内書をも此の中に入る)

八 政治

甲 政治學

イ 國家學 □ 國法學 八 憲法 二 議會 木 行政學

乙 法律

イ 法理學 □ 法制史(内國外國とを分類すべし) 八 刑法 二 民法(更に身分、債に分類すべし) 木 商法 へ 訴訟法(民事訴訟、刑事訴訟、訴訟法を含む) ト 國際法(國際公法、戰時國際法、條約、書等をも含む)

丙 經濟

イ 政治經濟學(經濟哲學、經濟史等に分類つことを得) □ 財政學 八 殖民(殖民に關する類)

丁 社會

イ 社會學 □ 風俗志 八 雜記(新聞雜誌、其他社會に關する雜書)

戊 統計

イ 統計學 □ 統計表

己 兵事

イ 戰術兵法 □ 陸軍 八 海軍

九 産業

甲 農業

イ 農學(學說並に歴史を含む) □ 山林 八 牧畜 二 果樹栽培 木 養蠶 へ 養禽

乙 水産(漁業、採海、其他)

丙 採鑛(金、銀、銅、鐵、寶、石等分科)

丁 工業

イ 土木工業(建築をも含む) □ 器械工業 八 化學工業 二 電氣工業

戊 測量

己 航海

庚 商業

イ 内地商業 □ 外國貿易 八 銀行 二 簿記

讀書と自修
辛 交通

十 醫學

甲 生理學

乙 解剖學

丙 組織學

丁 藥物學(調劑を含む)

戊 病理學(内科外科)

己 診斷學(同上)

庚 法醫學

辛 衛生學

十一 理科

甲 物理學(力學、電氣學等各科を分類するも可)

乙 化學(こゝも亦専門的に分類するを得べし)

丙 天文學

丁 地文(地質學、氣象學を含む)

戊 博物學

イ 生物學 □ 人類學 ハ 動物學 ニ 植物學 ホ 礦物學

己 數學

イ 數理 □ 算術 ハ 代數 ニ 幾何 ホ 三角、微分、積分

十二 美術并に諸藝

甲 美術總說(美學をこれに加ふるも可)

イ 美術史 □ 西洋美術 ハ 東洋美術

乙 繪畫(日本畫、西洋畫等、圖意分類)

丙 書法(書法、手本類)

丁 彫刻

戊 意匠圖案

己 音樂

庚 寫真(或は印刷する書籍に關する)

書籍の分類

辛 遊技

- イ 茶道
- ロ 生花
- ハ 野球
- ニ 水泳
- ホ 端艇
- ヘ 園碁
- ト 將棋
- チ 遊獵
- リ 演藝
- 又 相撲

人々好む所を異にし其の專修の學科も同じからざれば此の如く廣汎の書を一人にして藏するもの稀なれば其の好む所若くは修むる所の學科には細別を付し他は廣汎なる分類を用うるを便利とする、以上の分類は主として多數の書を藏せる讀書家又は圖書館に於て行はるゝものなれど、此の他自修研究者に取りて最も便利なるは問題分類法である。これは其の研究せんとする問題を中心として其の參考に資すべき書籍を分類するにて、例へば平安朝の歴史を研究せんとせば、日本書紀、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄等の六國史并に古事記や本朝世紀、百鍊抄、水鏡、扶桑略記、大鏡、今鏡、榮華物語、愚管抄、古事談、續古事談、古今著聞集、十訓抄等や平安朝史や平安朝文學の書を一例に置くとか、宇宙といふ問題を研究せんとするには天文學の書籍、哲學の書籍、神話の書籍、宗教の書籍の中よりそれに関

問題分類法

するもの例へば三宅博士の宇宙とかヘッケルの宇宙の謎、周易、創世紀、俱舍論プラトーン全集等を一括する方法で、學者并に著述家等が慣用の書籍整理法である。併し此の分類は一時的で其の研究の題目の變するに従ひ、曾ては甲の研究に屬したる書が又乙の研究にも参照せねばならぬことゝなつて動搖甚しければ、書籍の整理は上來舉げたる三種の中最も便とする所に依り、別に問題索引を作りて搜索に便するは最も伶俐なる整理法である。
要するに書籍の整理は人々所藏の多寡により其の方法も必ず一定し難けれど、唯だ其の搜索に無益の時間と勞力とを費さざる程度に於て工夫するを旨とするのである。

第四章 讀書雜訓

一 書籍の鑑賞

自修の最要義は讀書にあり。讀書の第一歩は書籍愛好の念を抱かしむるにある。書籍愛好の念未だ起らず、讀書の趣味未だ解せられざる間は到底自修の念を高からしむることが出来ない。されば古來の學者は何人も此の書籍愛好の念を抱かざるはなく、遠き昔のアレキザンドリアの圖書館の門扉にはデイオドロスの心靈の慰安者なり精神の醫藥なりといへる語を刻し、有名なる希臘の哲學者プラトンは書籍は彼等の父祖を神化する不滅の子孫なりと告げ、支那の大禹は黃帝の書を宛委山下に得て通水の理を知り、武王は踐祚の三日諸太夫を召して丹書の語を聽きたるの類其の例に乏しからず、今四五の吾等に緊切なる愛書言を引用して讀書趣味の鼓吹に供せんか。

十四世紀に於て世に在りし英國の偉人ダーハムの僧正リチャード、バリーはいふ書籍は鞭撻を加ふることなく、又叱咤することなく、衣服金錢を

圖書館の門扉

プラト

禹と武王

リチャード、バリー

要することなくして吾等を教訓する教師なり、若し汝にして之れに近づかんか彼れは睡り居ることなく、之れに就て疑を質さんか彼れは決して何事をも包むことなく、汝若し彼れを誤解するとも、彼れは決して不平を唱ふることもなく、又汝如何に無學なりとも彼れは決して之れを笑ふことなし、されば智識の圖書館は萬有の富よりも貴く、凡そ我が得んと希ふ所のものにして之れに比すべきものあることなしと書籍は實に他に比すべきものなき智識の寶庫である。

ペトラル

彼れと殆んど同時代にありて書籍の蒐集に力を盡せしフランシスコ、ペトラルカは書籍を以て友人に比し予は幾多の友人を有せり、これと相會ふことは我が心をして樂からしむ、是等は皆な各時代の人にして又各國の人なりといひ予は彼等と語らんと欲する時に語り、去らしめんとする時に去らしむべく、彼等は何等の煩累をも予に與へず、予の質さんとする所のこととは如何なる疑問をも直に之れに答へ、予をして釋然たらしめ、或者は予に語るに過去の事蹟を以てし、或者は予に示すに自然の秘密を以てし、時に或は如何にして生